安南筆記

乙

五

1曾5
494
5

中野氏藏書
品川圖書

一武藏鐙　武藏鐙伊勢物語夫木抄庭訓往来新猿楽記源平盛衰記等ニ見ヘタリ天明元年辛丑十二月四日予古キ鉄鐙ヲ求メ得タリ甚古クシテ地肌鹿タリ鉄色紫ニテ鍛甚堅シ全体ハ作ノ木鐙ニ似テ小形也カコクビアヲノカズ大ニ反ラズ鳩胸中少シ高シ大ニ突出ズ肩ヨリ栖葉ノ通リ外ノ端ニキテウメンアリサスガハ佐々木掛ノ如シ無左右也サスガノ出入ノ穴ハヘウタン形ニスカシタリカヱ頭ノ下ヨリ舌先ノ外稜(カド)マデ五六ノ矩ニ分タリ惣躰無文ノ鉄地ニテ内ハ朱ニテヌリカコクビノ正面ニ金澤ノ住ト銘アリ今此方ノ鐙ニモ銘同シク金沢住トアリ金沢ハ武藏

越後高岡 翌日 谷溪疑 園圃書記

門 4 5 甲 巻

神馬藏書

国ノ地名也是古所謂武蔵鐙也○加州金沢街掛ノ鐙ア
リカコクビノ正面ニ加州金沢住ト銘アリテ象眼ヲ
入タリ惣体サマ〴〵ノ文ヲ象眼ニシタリ全体大形
ニシテカコクビアシノキ反リテ鳩胸ノ中大ニ突出
テ見悪クシサスガ毎左右ニ非ズ武蔵ノ金沢掛トハ
大ニ違タリ

一鎧威毛　鎧ノオドシゲト云文字威毛ト書キ来レリ
俗用ニハ是ニテモヨキ也本字ハオドスニハ浸ノ字
ヲ用ヘシ玉篇ニ浸七林ノ切綫也詩魯頌ニ見冒朱浸
ス以朱銭綴貝而飾冒也トアリ朱浸ハヒオドシ也オ
ドシゲノケハ系ヲ用ヘシ綫ハ思箭ノ切線ト同シ又

系ノ字サノ浸ノ一字ニテモオドシゲトヨムベシ

一侍大将足軽大将　大将ト云ハ総軍ノ主将也サレバ
侍大将足軽大将トハ云フマジキヿナレ𪜈右ノ如ク
云ヒ習ハセリ侍隊長足軽隊長ト云フベキヿ也

一紫　玉篇云子爾ノ切色也字彙云黒赤ノ間色　按漢
土ニハ黒赤交ル色ヲ紫ト云此方ニテ今云トビ色カ
キ色ノ類也此方ニテムラサキト云ハ青赤交ル色之
ムラサキニ紫ノ字ヲアテタルハ似タル故也色ヲ本
ニシテ字ハ借ル也此方ノムラサキト漢土ノ紫色ト
ハ少違ヌレ共紫字ヲ借テ用ル也或人字ヲ本ニテ此
方ノムラサキヲモ黒赤間色也ト云ハ字ニ泥ミタル

也万事万物和漢同モアリ異ナルモアリ異ナレ共似タル事アレハ漢字ヲ借テ推當テ用ル也上古ヨリ云傳ヘタル言訣物ノ名等ハ本ニシテ文字ヲバ後ニ推當テ付タル也推當ナル故少違タルヿモアレ𪜈宥メテ用ル也此方ノ事物ヲ云ニ文字ヲ本ニシテ云ハ腐儒ノ所為也

一いろは　麒麟抄云卷第九　或書曰護命僧正イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツ子ナラムウ井ノオク弘法大師ヤマテフコエテアサキユメミシヱヒモセス

一麒麟抄十卷　同見聞上下二卷　大宮(タイクウ)亮正四位下良經

逆ト有時代可考筆道ノ書也指テ可取ヿナキ書也大宮亮ト云ハ太宰大后亮ノ畧称ナリ

一鐙名所　鐙ノ頭ノ輪ヲタカ頭トモタコ跋共云ハ皆誤也カコ頭ト云本也鉸具頭ト書也カコクビ如頭ト云ヿ也鉸具ハサスガ共三ミヅヲガ子共云鉸具ノ在ル処ノ頭ヲカコクビト云又三ミヅヲガ子ト云シ。ビジヨガ子又ビトウガ子ト云誤リ也ミヅシガ子ト云ハミヅヲ革ヘサスカ子也三ミツヲ革トハチカラ革ノ穴アキタルヲ云ミヅトハ穴ノ事也針ノ穴ヲミヅト云ニ同ジミヅシノヲハ緒也又サスガト云ハサスカ子ト云ヿ也子ヲ畧ル也又鐙ノ端廻リヲ。ヤナイバト云ハ

柵端也端ノ左右エ折レ曲リタル形カ。シダレ柵ノ枝ノタハミタレタルニ似タレバ也又鐙ヲフミナガラ馬ノ腹ニ鐙ヲアツルヲカクシ入ルト云カクハ脚ノ字也

一業平桜哥清渇　古今集春ノ上ニなぎさのゐんん桜を見てよめる　在原業平朝臣　世の中にたえて桜のなかりせばなるのんかのどけかりまし　飛鳥井栄雅

人の物に此音断(タヘテ)と不断(タヘテ)との二つの心ありといへるもあやまりなり栄雅人は欲に精しかるゆゑに似たりこゝえそのてをよむ渇りてハ音にあらずして必ずごろ渇りしびきこそよむに極まりたる音こゝ為て二つの心をかゝるべし清渇をうらがふ渇りしびは此欲り清渇を論じべきハのとけかりまし

のしをまゝ之をこそよむとにこりてよむとまて此をまゝするん渇源ありしし文字渇りてよむ時は欲の心　世の中に桜が絶てなくハ春の人の心ハ此とけくある間に桜を見れば之そ人の心乃どけくハあるといふ心こゝえそハ桜が絶てなくハ春の人の心がのとけくあるべきものを桜がある

ゆえんがはとなるまといふ心こゝ何也へ桜があれば心がのどかなるゆゑといふ桜のいまごさゐ時をはしやさくなるとやさくと詩ゐ○まちどをる思ひ居て此初をばけふやはりまゐるあれや寒りしなるとまちまびすでにはりまゐれば心やもの如とろふべきあるやうにろふ

べきとうしろめたく思ひやゝ如とゝへゆけば雨やぬるべき
風やあらべきと心もとなく思ひやちりをむれだりやちり
つゝれ物をやまた紫りなりかゝる今まもたやこんぞかぎ衆
なりと思ひなげき春を桜ゆへ人ゆへ人の
どうなるぬしされば此の中ふさぎがたくなるハ去のん
ハのどうなるべきものをといふ事の心を桜を花す
事の基源をゆえよかくのごとくよめるし先行者の本
こゝもされば古歌をよむるハ清濁ふ人を用べしぞり
ようむべからず

古今集正本　細川玄旨詠歌大概抄云故禅閣伝られし
貫之が奏覧の古今とて正本と思へり至重なるべし重なきゆ

をのゝまゝりを取ち定家卿を定むる時諸本を引捨してる
筈をくれて本来の家の説あと異云分明まゝ見へたり二条家
をなりけんとかゝしハ京都黄門の所ハ用べきなるべしぞ
まやこゝ　貞丈云集の撰者貫之を恒して後の定家を
主くに家を立る者の偏執我錫かくのゆし　諸君これ同し
ぬけまてハ西程に遠ひきあるにあらずかさし

一貞宗作ノ鞍　天明元年辛丑十二月廿二日得之ヲ出岐（エギ）
永正五年四月三日トアリ又貞宗ノ花押アリ永正五
年ハ義澄将軍近江国ニ出奔ノ年也永正五年ヨリ當
年迄二百七十四年ヲ歴テ吾先祖ノ手作ノ鞍再ヒ五ヘ
家ニ返リタリ　貞宗ハ伊勢守也京都将軍ノ政所職御所奉行
臣四位下侍臣依之貞宗朝臣ト人称之平後号金仙寺

一だまと云詞さへもいふ詞　だまとは人へとは同じかけの詞とも歌
ともへ知べし然るに世にだまと云詞を制の詞と云風之
だまの代りにさへと云詞を用ひ八云る遣ひて誤りこともなだまの
異名と　だまとへと云ふ人へ何る八定家の比より以来の歌に　ありける代々二字につけけり　唯の字入八
音ノ字に当るこさへハ何まさへの異名　俗にあまり　さへとも　あまりとも
云るものの何まりとそひへりと云ぞ　ト　さト音相通也さつらと
剰ノ字にはかるとされバだにさへ同訓にありし代の俗語に
だまといふべきをさへとをる体く誤りて歌にも用ひハ誤
なり

一金銀礼為　諸国金山より出ル金も銀も何方より出る金も
ても石中に含る金を以て云銀也にて打落き、粉にして漉ても水

にゆれり分けト家別砂金もそれ故に名は諸国方とも分け
色以て每月付候銀金の位に上下ハ無し一統に交りしの金とん
候た、ここに極金にある如き地にて通用称するにおなじ
金は銀とかへ当せやとて来り吹ワけ絹とぬき焼流す
所每月金とも花に流れ有月毎年上へ銀をおかへ有月ハも
は金も銀か入れ千振も世に在るを取知られしゆへも
名々戸塚山より出る山奉行室と申ける印ハ金ハ高安金
分み入候も金位を定めしへども京に流ガの世にあるかのごとく
亦ねてまか長金銀ノ字全く字に保金も銀ほし入れ古金し位く
中此の緑金に流用べく入れり位あしくゆる下高所毎月文ノ
字金と金銀六文字ず今日の内へ来る割半し是にの房く当金く

座ハ勿論金位ト違ひ銀の位も吹揚ねば銀座ゟ承来
細工銀ハ如何ニ申候 尤ハ其儀ハ無之候得共細工銀ニ而
相成り候ニ而ハ不相成候

一 金位揚ケとハ申事ハ申出候ハ位不宜候ニ付揚候 二十文
位ゟ上の金ニ而御座候 天笠ニ而 同淳擢金とも申候金ハ
銅交り候金ニ而位悪敷の様ニ成候金銅を吹申候 文銀極
上ニて有様と申し候ハ銅を吹揚銀ゟ細工銀ニ而相成候
銀ニ而御座候

一 下金とハ如何ニ候 腐金ハ鉛を入吹合セ申候 吹揚
銀ゟ細工金ニ而御用ニ文庫銀ニて銅を入吹申候金ニ而銀を
吹揚候ニ而も 細工人の仕方ニ而御座候ニ付

入用絲てかしり
一 貞丈間 金銀ニ銅鉛(鉐カ)ヲ交ヘタルヲ吹分ルニハ金銀ヲ火
ニテ沸シ硼砂ヲ交テ銅ノ盤ニ流シカクレバ自ラ分ルト云
右金銀の吹分を家来ニ而紀ニ而候ニ付 古傳御座候ニ付
相成候ハ識者ニ而御座候 以上 天明元年丑年 月佛斎子 識之

一 相手 我ニ対スル向ノ人ヲアヒテト云 俗ニハ相手
ト書也 本字ハ敵ノ字也 敵トニ云ハ合戦ノ敵ニ限ラズ
詞也 古語ニハアヒテノ変ヲカタキト云 小児ノ遊ビ
相手ヲアソビガタキト云類也 源氏ニ見

一 支證 物ノ証拠ヲ古書ニ支證ニ備フナドヽ書タル
アリ 是俗語也 本ハタトヘバ所領ノ地ナドヲ争論シ

テ奉行所エ訴エ出ル時其相手ノ訴ノ赴ヲ支ユルガ
為ニ古手諺文ナドヲ支證ト云タルカ一轉シテ訴ニ
非ル事ニモ證據ヲ支證ト云習ハセリ俗語ニハ如此
ノ轉用間々アリ

一和說（諺）　京大坂ナドノ詞ニハワンザント云古書ニモ
和諺ト云詞アリ本ハ両人ノ間ヲ他人諺言シテ相手
ト不和ニナリタル時ニ我実情ヲ述ベテ人ノ諺言ナ
ル由ヲ明ニ云ホドキテ相手ト和睦スルヲ和諺ト云
ヒタルカ一轉シテ諺言ニテナキ事モ事ヲ明ニ云ホ
ドクフヲ和諺ト云習ハセル也是又俗語ノ轉用也如
此轉用傍通ヲ悟ラスシテ唯字面ニ泥ミテハ昔ノ俗

語ニ通達シガタシ

一ケバヤ　源平盛衰記巻十七石橋合戦ノ条与一モ
ようち出ければ佐殿ハ美頁ノ装束けばやまうもきく
よかしとのゝまふ云々ケバヤハ花麗ゝりをいふ今江戸詞
ニ ケバくシキト云ト同じケハ気也ケシキヲ云シヤハ丑也丑
ト音相通也丑ハ堂ノ字之花の夕ばえなどゝ有よめるも同じ
色ええてあざやも云色うゝハしきこ

一手皷　壹岐判官知康手皷ノ上手ナリシ故皷判官ト
云名ヲ得タリ東鑑源平盛衰記平家物語等ニ見エタ
リ手皷トハ今ノ小皷ナルベシ皷トハ革ヲ張リテ鳴
ス物ノ総名也太皷鞨皷等ハ撥ヲ以テ打也小皷ハ手

ヲ以テ打ツユヘ手鼓ト云ナルベシ盛衰記ニ知康ハ
究竟ノシテヽイノ上手ニテ鼓判官ト異名ヨビケル
云ミシテヽイト云ハ鼓打ツ曲ニシテヽイト云フア
ルナルベシ

一鷹飼犬牽帽子　鷹飼錦帽子ヲ著ル事　西宮記江家次
第等ニ見タリ犬牽ノ帽子ハ定家卿鷹三百哥ニ称人
のかたちしぎふも見えつるをふるき松皮たりたるきは浮
犬飼ばかしを松皮ばかしと云ヒ并ニ出しうへハ不定ナレ
不知可尋之とあり鷹飼犬牽帽子の称ハ栄花物
語の絵ニ見えたり別の古画にも見えたり今略　又案西宮記押
帽子犬飼所用也
見雅夜式

一什物ヲ宝物ト心得ルハ俗ノ誤也寺ノ什物ト云ヨリ語来
ルナルベシ史記ノ什器ノ注ニ索隠ニ曰什ハ数ヒ人家
常ニ用ルノ器非一ニ故以什為数漢書注ニ師古曰古者
師行二五ヲ為什ト食器之数必共之故曰什物什具ト今通ヲ為
生ヲ之具ト為什物亦猶従軍作役若干人為火共蓄調度
以上小補韻會古軍兵ノ人数組合ノ法ニ五人ヲ一組ニシテ是
ヲ名付テ伍ト云此内一人組頭有リ是ヲ伍長ト云右
ノ伍人組ヲ二組合テ都合十人組トシテ是ヲ名付テ
什ト云是ニ頭一人付テ伍ノ二組ヲ支配サセル其頭
ヲ什長ト云什ヨリ以上ノ組合千万人モ皆此法ニ准
ズル也サテ陣中ニテハ十人一火トテ十人ニ竈一ツ

十

立テ鍋モ釜モ其外諸道具ヲ十人相合テツカフ也一人別々ニツカハズ什ノ一組十人ガ相合テツカフ故其道具ヲ什物ト云也什物トハ一人ノ物ニ非ルヲ云也ソレニ准ジテ佛寺ニ前々ヨリシテ其寺ニ付ケ渡リニメ前住ノ僧ヨリ後住ノ僧ヘ譲リ渡ス諸道具ハ當住ノ僧一人ノ物ニ非ズ故ニ是ヲ什物ト云也其什物ノ中ニハ寺ニ付タル宝物モアルヲ什物ト称シテ人ニ見スル故俗ニハ什物ト云ニ同事ト思ヒ誤ルヽ

一交割物（コウカツモノ）　俗ニ宝物ノ事ヲカウカツモノト云交割ト云ハ佛寺ノ什物ノ事ヽ棠蔭比事ニ見エタリ是モ俗ニ寺ノ什物ヲ宝物ト云フト思ヒ誤ルニ依テ交割ヲモ宝物ノフト思ヒ誤テ宝物ヲ交割物ト云ナリ

一八道行成　和名抄雅藝具ニ八道行成讀夜佐須賀利トアリ今モ田舎ニテハスカリト云ヤサヲ略シテ云也江戸ニテハ十六ムサシト云十六ハ子馬（コムマ）ノ数十六アリ親馬（シヤ）ヲ除テ云也ムサシハ馬指（マサシ）也マトムト音通也十六ノ馬ヲ指テト云フ也将棊ヲサスト云ニ同シ将棊ノコ馬モ馬（ウマ）ト云ハ古キ訓也又ヤサスガリト云ハヤススガリナルベシヤスハヤスジノ略語ニテハノ道スシヲ盤ニ画ク也スガリハ子馬ヲ以テ親馬ニスガリ迫ル也スガルト云ハ縋ノ字ニテ縄ヲ付テ離レザルヲスガルト云是親馬ヲ追テ離ザルノ意ニテ

スガリト云也

一文書一通　文書ノ数ヲ一通二通ト云ハ俗語ニ非ズ
字彙ニ書ノ首末全キヲ曰通後漢崔寔カ論ニ一通書ニ坐側ニ

一正月宝舟繪　古代ノ書ニ宝舟繪ヲ正月枕ノ下ニ敷
事所見ナシ京都将軍ノ比ハ既ニ此事アリキ沢巽阿（将軍家ノ同朋也　大永天文永録ノ比）
覚書に云貞為し御調進節分御船
絵所より一万年上京小川扇屋にて書献又は存知候
清頼様に於て出て上に御被成候人の往来候に
かせ候ハ又其のちに宝舟共御覧被成候代に茶福山
形物卯時御船の絵のより宝舟御本より上洛ニ
京に至り其ニ於て仰付貞孝様ハ御宿所進候よし
宝舟の絵之大に仰付候扱御身二ツ又御書進候茶
て御ハ小川合上臈中臈御末女まで八将軍ニ入候御よ
て調進或時節分の御所において御宿を御所にて役の御
舟にて御て御に福山絵所に被仰付候の御役にて下ニ条
春日御に宝舟まて御出を書に御節分の御宝舟絵
に被仰付候絵所にて仰付候調進の御もなし之に似て候を
見るに其節分の絵宝舟の絵を用ひしよりと見えて宝
貞孝も伊勢伊勢守貞孝の将軍家の政所職之貞孝
より宝舟の絵を献せしに貞孝は本より文禄に御進上を
の書見へし

一裲襠　衣服令義解曰一片當背一片當胸故曰裲襠

加茂競馬ノ繪ナドニアリ
肩衣ノ如キモノナリ

一 ジヨサイ　俗語ニ事ヲ粗略ニセザルヲジヨサイニセズト云　此ジヨサイト云文字詳ナラズ俗ニハ如在ノ二字ヲ用コレ旣モ非也如在ノ二字ハ論語ニ祭如在祭神如神在トアリ是ヨリ出タリ然レ𪜈此語ハ神ヲ祭ル時ニ神躰ハ其場ニ在ス目ニハ見ヘテ子𪜈其場ニ神躰ノ目ニ見ヘテ在ガ如ク尊ヒ敬テ祭ト云フシサレバ如在ノ二字ハ俗語ノジヨサイニハ當ラズ不可用按スルニ俗語ノジヨサイニハ常裁ノ二字ヲ可用裁　字彙ニ裁度也トアリ裁度トハ事ヲ取ハカラフ事ニテ裁判裁斷裁許ナド、云モ皆事ヲ取ハカラウ事ニ裁ノ字ヲ用フル也常裁ト云ハタヾヨノツ子ノ取ハカラヒニテ格別ニ身ヲ入テ取ハカラヒニテ格別ニ身ヲ入テ取ハカラヒシセヌシ是粗略ナル取ハカラヒ也故ニ事ヲ粗略ニスルヲ常裁ニスルト云フ粗略ニセザルヲ常裁ニセズト云也ジヤウサイヲ約ツメテジヨサイト云也如在ノ字ヲ用ルハ甚タ道理ニ當ラズ誤也サレ𪜈世人用来ル字ナレバ如在ノ字ヲ用テ通用スベシ本義ヲバ兵ヘ知リ可置凡俗ノ事皆如此心得ベシ

一 森字俗作𣏟　森字俗ニ𣏟ニ作ルハ𣏟ヲ誤リ写タルシ

一 鷹飼無禮　摂政殿鷹三百首歌の注ニ鷹飼ニ礼なし

といへどもさりとてハ一天の君に君おハしまれ所な
まぜ礼をなし心に油断せべし　ぞとこそ夢相聞
をせ居てハ人に礼をせぬるす　故実なり

一宝舟繪　壬寅二月中が家に賀客来る床に禁裏を
用いるに宝舟の絵を置け置こるを客見て宝舟絵中
ハ不用し此絵を用いされたれどとて福の事なべき理なし
其益のおこと云貞文云天下万国の人情皆凶禍を悪
ふ吉福を好すなりハ一同に年始にハ吉福を祝
べきぬを用いて賀ふに備ふるものに宝舟の絵実に
其益のおこといへども其を用ふりとて人道の害れし
害になりざるおなれば禁止せるに及ばず用ひも捨るも

人のんるまりをべしれ人ハ害あるものハ世俗に用ひもの
なりとも固く禁止をべし世ハ正月ハ檀蒲（カルタトスツ）
をおつるまありとも博奕なりそれハ人ハ害あるものに
固く禁止すべし宝舟を子益なりと云えるて
門に松竹を立るも其益にいたんれ松竹を立るに人
ハ害なし　都鄙まで残ともふそれを以て治世を
かゝする祝物とするなり家国の風俗に凡人ハ害な
きるまハ其国を世の風俗に従て居るまなきを
聖人の教に叶ふものに理学を好む人ハ宝舟を悪
むぬきの偏見あり理に従へて理を以て和見識我
先だり居せる所偏見出るなり

一 鷹のせき鈴　摂政殿鷹三百そ歌の詩(注カ)にせき鈴とゆへハ
鷹をつなぐ鈴なり又云鷹のせき鈴を此をくにえて(てカ)鷹
を結ふ事に鈴しハ大鈴のるすに大鈴ハ鷹のあしかえをも
ひ付る鈴にこぶしにあるまも架(ホコ)るつなぐまも大鈴を用
るに大鈴の一名せき鈴といふし

一 シノブト云詞三品　人目をしのぶ又しのびくらまなぐ
いふハ凌(シノカ)の字に芳をしのぶ又うき人をしのぶなぐ云ハ
菓の字にしたえしのぶ又酢をしのぶなぐ　云ハ忍の字なり
凌の忍ハ粗(枉てカ)しのぶに菓のしのぶハ迫ひしたふに忍の
しのぶハおしへてかんまんしるし

一 守宮神　栄花物語花山の光にハ花山院宮中をしのび
おもひしるを記しうるを事にハ中納言ハ守宮神かしこ
所の内あるをてふしまろび給ひてこゝかるの先ハ口づこ
りあがらんさせまへるぞやとおしまろびなき給ひて按
守宮神ハこゝやもりの神とよむ　ひでしかしこ所とさして
云なるべしさぐにかしこ所といひてもあるべきを守宮神
かしこ所とつゞきていふるハかの時宮中を踏み汚がし
まり付なれば守宮神の三字をとりしこ所の上にかゝぶらせし
なるんかしこ所守宮神と申なるまハ何のる(書カ)まもいまだ
見当り侍ら鈴もかしこ所ハ廣く天下をまりまるれば
宮中におはしまれかしに宮中をまりまりんまハいふまや
及ぶ守宮神とかしこ所とを二つにまるすハよりかし

ぬ欲 右京法印の問ふ事

一 帳随形（カリノズイシン） 源氏お供あるべきにたるの切りの座ハ殿上のそうなどのするなりハつ孫のなりあるに 殿上のそうハ元人ハ答し

云々 源氏秘訣云長和五年十月廿三日後一条院の内禊の行幸に楊殿御堂殿供をし給ふまゝりて一員と見えてきしに○鹵簿（ロフ）の事とハ行幸の供奉の行列を申さるれのなし鹵々所し所板に申さる簿し

一 鳥佳字（佳） 玉篇に鳥丁了切説文ニ長尾禽惣名シトアリ鴆鷁等ハ長尾アル ユヘ鳥ニ从（シタカ）フシ正トスベシ佳字玉篇ニ之惟切鳥短尾之總名也トアリ是ハ尾ノ長短ニ抱ラズ羽アリテ飛ツ鳥ノ總名ヲ鳥ト云依之短尾ナル鳩雁ヲモ鳥ニ从テ鳩雁ニ作ル也

一 梅谷渋（ウメヤシブ）付 木蘭地（モクランヂ） 染艸ニ梅谷渋ト云アリ是ハ紅梅ノ木ノ根ヲ切テ濃ク煎シ出シタル汁也染ル時明礬ヲ少シ交テ染ル其色赤ク黄ヲ兼タリ狩衣直垂ナドノ色ニ木蘭地ト云ハ是也木蘭ハ梅花ノ異名也蘭ハ香艸也梅ハ木ニテ香アル ユヘ異名ヲ木蘭ト云右ノ染色濃ク染レバ少焦シ色ヲ兼タリ又云離騒ニ梅花ナシ木蘭ヲ詠せり木蘭ハ梅花ノ事ナリト云木ニテ香ル ユヘ木蘭ト云フ也

一 上様 太平記巻七先帝舩（ヲフ）上臨幸ノ条ニ上様ハ未タ知召ひや云々

一光源氏ノ大将　三条右大臣方大将定方公実男也世ニ
光源氏ト称セリ延喜十三年三月十三日薨 称号緑紫
式部ガ光源氏物語ハ此称ヲ取テ借リ用ヒシ也

一天孫　博物志云泰山一曰天孫言為天帝之孫也本朝
ニテハ天子ヲ天孫ト称ス天神ノ子孫也アメミマト
ハアメノカミノ御孫ノ畧語也

帥師ハ誤

一白師黒師　基高卿色白時人称白師季仲卿色黒時人
称黒師師名官号大宰師也 称号緑

一経史古讀俗讀　假令論語雍也篇曰子謂仲弓曰犂牛
之子騂且角雖欲勿用山川其舎諸ト云フ文ヲ犂牛之
子騂シテカツ角アラバ用フルヿナカラント欲スト

雖トモ山川其舎ンヤトヨムハ俗読也騂シテマタ角
アラバ用ルヿナカラマク欲スト雖モ山川其レステ
メヤトヨムハ道春点ニテ古讀也道春ハ業ヲ惺窩先
生ヨリ受ラレタリ惺窩ハ公家ノ人也 藤原為純ノ子ニテ受家々
十二代ノ孫也 惺窩ノ讀ハ古ノ大學寮ノ讀ヲ傳ヘ受ラレシ
ヲ以テ道春ニ授ラレシナルヘシサレバ其讀モ古雅
也今時ハ其讀迂遠也トテ改テ俗讀ニスル人アリ讀
雅俗ハ文儀ニアヅカラヌ事ナレ𪜈俗讀ハ賤ク聞エ
古雅ナルコソ文道ニハヨケレ又詩経文選千字文ナ
ド音訓ヲ一度ニ並ヘ讀スルヿモ古之大學寮ニテ教
授ノ法ナルベシ今時ハ如此ノ故実ハ廃レテ唯唐人

ノ真似ダニスレバヨキヿニナレリ何ト讀タリ氏文
義ダニ違ザレハヨシト云フ人アリ我国ヲ輕シムル
学者ハサモアルベシ

一交野　是ヲカタノトヨムハ交ノ字カタミノトヨムヲ
畧セル也ちきりきなかこふ神をたゞりつて末乃
松山波こさじとハと云家の如きは交の字こゝろみと
ゑも彼も定るるを云なり　右の歌ハ我と彼と定る
なり

一鷹ナブリ　近国龍山公鷹百その注に鷹のむちを
鷹なぶりと云ふ定家公の鷹三百そにくらゑひきとし
とすしすゝ鷹なぶる擬にあしてハむちとぞ見るなり

むちとも云されぬ事をこゝ鷹とバ打つ
るなしねなるを拒くなをし或ハ鷹に餌の付らるを鷹
とすしせく付る餌を落さしむるしも鷹となでまれた
君の物なりなへ鷹なぶりといふし鷹のむちと云ハ何や
ありなり定家公の三百その注に長と鷹なぶり鷹
きをむちと云ふし注せるハ誤し又俗説に馬をむちと
いひ鷹にハぶちといふと笑るハ誤し古ちるを一ふにむちとも
ぶちとも古ちまり鷹をおるハなきなむちとも
ぶちともいふ留しに鷹なぶりハ藤蔓を杏に用ゆ
てゐんの下の楊枝のぬくおもひしぎ　ゐるゆしきおひぎ
ゐる処を筆形といふ也　鷹の羽をなでゝ羽を

[illegible]

一無乃字寧ノ字　経傳ニ無乃二字モ寧ノ字モ共ニムシロト訓ヲ付タリムシロト云詞ハ日本記並万葉集古今集等ニモ見エズ是レ古ノ大學寮ノ博士家ノ古訣ナルベシサレ共ムシロト云訓ノ意義ハ何故ト云事詳ナラズ　按無乃ハ俗訣ニ何ノ役(彼)云フハナイト云詞ニ當ル也寧ハ論訣朱喜ノ注ニ願辞トアリ俗訣ニ何トセヨカシ宋(来)レカシクレヨカシノ類ノカシト云詞ニ當ル也

一蓋字　蓋ヲケダシト訓ズルハ氣出シナレバ発訣ニ用ルニハケダシノ訓ニテヨシ又物事ヲ推量シテ云フ

取ニ蓋ノ字ヲ用ルハオホカタト云訣ニ當ル也俗訣ニオホカタカウデアラフト云フ詞ノオホカタハ蓋ノ字ニ當ルナリオホカタノ意ニ用タル蓋ノ字ニケダシノ訓ハワロシオホカタトヨムベシ万葉ニ蓋(ケダシ)ノ詞アリ

一長歌短歌　古今集ノ部立ノ標題ニハ短歌ト記シテ其歌ノ事書ニハ[illegible]トアリ真字ニテハ短歌ト書キ即其短歌ノ事ヲ假名ニテ[illegible]ト記セルヿ不審也是ニ付テ様々ノ僻説アリ貫之ハ右ノ如クナル事ヲハ必不可書貫之ハ真字ニテモ長歌ト書シナルベシ然ルニ後人彼ノ僻説ヲ好ム人短歌ト書改メ

テ其僻説ヲ実ニセントテノ所為ナルベシ藤原濵成
ノ歌詮標式喜撰ノ和歌作式等ニハ幾句モ長ク連子
タルヲ長歌ト記シタリ又濵成式ニ三十一字ノ歌ヲ
短哥ト記セリ共ニ是正直ナル名稱ニテ秘事モ口傳
モナシ又古今集俳諧歌ノ俳ノ字モ誹ノ字ニ記シタ
リ是モ貫之ハ如此書クヘカラス後人ノ書誤也貫之
奏覧ノ本ニ漫ナルヿ書ザルベシ定家口ノ貞應本喜嘉
禄本トテアリ度々古今ヲ冨シ改ソラレタリ今専定
家ノ本ヲ尊信スル事ニ成レリ右之書改ノ書誤等
ハ定家ノ所為ナラシ 欽定家ヲ尊崇スル餘リニ其誤
ヲ改メズシテ却テ横サマニ僻説ヲ作テ秘傳奥義ト

スルナルヘシ 如此ノ事ヲハ信服セズ

一子細 子ノ字ヲ用フルハ俗書也仔細ト書クベシ仔
ハ玉篇ニ則之切字彙ニ任也トアリ任ハ堪也仔細ハ
細マルニ堪タリト云ヿニテ至テ細カナルヲ云委細
ト云ニ同シ俗語ニ事理ノ事トシテ其子細ハ如此ナ
ドヽ云ハ非也是其事理ノ仔細ナルハト云意ナルガ
仔細ニ看ルナドヽ云ハ物ヲ委細ニ看ル事ヲ云也

一うたかた うたかたとかかなとあるを 抽物まは水の泡の
事なりと云文詞までハ寧口ムシの字乃ことなりと云へり抽
うたかたハうけたこ川とた意おほこうけたこと文字に
書けば空形ウツカタ之水の泡を丸くむのぬの形ハなきども中ナカハ

空なりこれはことへる実なるべし宝しきるをば詞なも
うたかたといふなり古歌に伊勢
思い川こゝにつゞなりて水の泡のうたかた人にあらぞ
きえめやと云心は意の者にて若し絶つゞ云へども
そかいしなく此思いは水のなんのぬくにて思ふ人なれ
ずしてきゑぬきるまやと云こゝ思ひむなしくきえめやと
いふなをうたかたと云こゝうたかたはむなしくと云なし寧の
字の意とするはあやまりし 寧ハ願ノ詞也ウタカタニハアタラズ 注者の推
量なり用ゆるべし又水の泡のうたかたと法ぐけれ
バ雲に水の泡の実名にあらずしなりと云ふべし水の泡の形
をうたかたといふなり著柴の者なり

雲のきゑて山吹うたかたも君が手ぬるゝ花ちるんかも
と云も君が手ぬるゝ花のむなしくちるんとし古歌
に水の泡のるを雲にうたかたとよめるもありうた
かたと云詞意を知りぬる人の者し
一 あらきなし 文字にハ無端無道とも書くせんなき
と云心又えかれしきたりなきるを云ともいふ説あり
皆能なりあらきなしハあじけなし無味気也
気音キ訓ケ也訓ヲ用テ音ハ不取 あらけ将しくあらきと云たとへば
今の西の味を味のなけもなきるのめく思ふなき
るをあらきなしと云こゝ情を味へざるに今世の
俗語にあじけなしといふ同し おもしろ下書 歌なり

さく花りこひ清身のあらぎなさ身よいつづきの
いりまたしげて　宿世の物の知ふじあらぎなく行ひ
人の香ふかやまたまぬる　あらぎなく清き花
の春もうしなどり夕着ふまりなしびまん　人と
うしくもうしめしあらぎなく世を思ふ也なる物なる
身を　人もうしの身を世をいぐとすべき　何事も思ふ思れきこし
仮るあどけなしと云る同じ　それの詞後代三重がな
きを欲の物ゆるどふ仮をとまきまへだしてこぐり
まち欲のちこふ仮て推量を以て注を仮ふるす
事ち欲を用く出よち欲の注と云ふるすあるさか
さるなるまし又仮説ふ物のかみまけのないと云も合

のあらぬかくつきましまるまるより知るる詞まく
即チ
召あじきなしと云も同じ意なり　あらぎ事なき
事なり

一　オモシヤル　オシヤル　キヤアル　是田舎人ノ詞也
オモシヤルハ御申（オンモウシ）アルノ約語也　オモシヤルハ仰（ヲホ）セ
アルノ約語也ギヤアルハ御意アルノ約語也約語ト
云フアルヲ知ベシ

一　チヨボイチ　下賤ノ者博奕ヲ打ツフヲチヨボイチ
ト云ハ樗蒲（チヨボ）打（ウチ）ノ訛也雙六ヲ打ツ事ヲ樗蒲ノ戯ト云
也故ニ古是ヲ禁制セラレシ也

一　掛鏡（ラ）為神躰（ラ）　諸神祠ニ鏡ヲ掛テノ神躰トスル事ハ

八咫鏡ヲ以テ伊勢大神ノ神体トスルヲ学ビタル也
八咫鏡ハ天照大神ノ常ニ持給ヒシ鏡ナルヲ御孫瓊
々杵尊ニ譲リ授ケ玉ヒ此鏡ヲ見ルヿ吾レヲ見ルガ
如クセヨト宣ヒシ故ニ其鏡ヲ大神ノ神体ト崇メ祭
ル也是其故アレバ也諸祠ノ神躰トスル鏡ハ其神ノ
常ニ持玉ヒシ物ニモアラズ此鏡ヲ見ルヿ吾ヲ見ル
ガ如クセヨトノ神訣モナキニ伊勢ノ神宮ノマ子ヲ
シテ鏡ヲ以テ惣シテ諸祠ノ神躰トスル事ハ神徳ハ
鏡ノ一圖相ニシテ稜ナリ光明清浄ニテ一點ノ曇リ
ナリ万民ヲ照シ守リ玉フノ表相也拜禮スル人其鏡
ニ向ヘバ其人ノ形映ル是則神ハ汝ガ身也心正直清

浄ニスベシトノ教ノ為ニ何レノ神ノ神躰ニモ鏡ヲ
用ル也ト云ヘリ　貞丈云此或説ハ仏法ノ説ニ宋儒
ノ心学ヲ附會シテ理説ヲ述タル也上古ニ如此ムツ
カシキ説ハナシ宋儒ノ心学理学ハ鎌倉ノ北条ガ末
ツカタヨリハヤリ出シ也サレバ其以前ハ右ノ如ク
ナルムツカシキ説ハナシ天照太神ハ此鏡ヲ見ル事
吾ヲ見ルガ如クセヨトノタマヒシヨリ外ニムツカ
シキ奥深キ理説ヲハ宣ハザリシ也ムツカシキ事ナ
キハ神ノ心也神ノ事ヲ奥深クムツカシキ説ヲ述タ
ルハ皆後代ノ作リ事也用ユルヿ勿レ

一立幣為神体　小祠ナドノ鏡ヲモ掛ザル祠ニハ幣ヲ

立テ神躰トスルアリ是モ亦當ラヌ事也按ニ漢土ハ
云ニ不及万国共ニ各風俗ハ異ナレ𪜈其国々ニ上古
ヨリ傳ハリタル礼儀アルモノ也我国上古神代ニハ
人ニ謁見スルニハ必双サヲ持向テ進物トス是上古
ノ礼也其ヌサハ杜仲ノアマ皮又ハ麻苧等ヲ串ノ頭
ニ挾ミタル物也是何ノ用ニモ立ザル物ナレ𪜈是ヲ
礼物トスルヿ上古ノ風俗也後ニ紙ヲ漉テ出シテヨ
リ紙ヲモ切裂テ串ニ挾ミテモ用ル也此ヌサヲ用ユ
ルヿ漢土ニテ謁見ニ用ル進物ト云ニ當ル故ヌサニ
幣帛ノ二字ヲモ當テ用ル也右ニ云如クヌサハ礼物
ナル故後代ニ至リテモ神ヲ拜スル人ハ上古ノ礼物

ヲ神ニ奉テ礼ヲ行也手ヲ拍モ上古ノ礼ナルユヘ神
ニ向テ手ヲ拍ソ是又上古ノ礼ヲ行フ也右ノ如クヌ
サハ礼物也神躰トスベキ物ニハ非ズ又云白ニギテ
ト云ハ白ヌサニテ杜仲麻等ノアマ皮ノ白キ所ヲ用
ユ青ニギテト云ハ白ヌサニテ杜仲麻苧等ノ麁皮ノ
青キ所ヲ用ル也礼物ニ精粗ノ差別アリシナルベシ
ニギテハ即チヌサ也ニギテト云ハ謁見ニ是ヲ持テ
手ヲニギハス意ナルベシ又ユフト云モヌサノ事也
ユフシデト云ハシデハ缶レサガルヿ也又ユフヲ木
綿ト書クハ杜仲ノ一名ヲ木綿ト云杜仲ヲ折レバ白
絲ノ如クナル物アリアマ皮也故ニ木綿ト云杜仲麻

等ノアマ皮モ木綿ノ類ナレバヌサニハ通シテユフト云也又ヌサヲ持テ左右左ト振ハ上古ノ礼ナルベシ謹上再拜云々ト唱ルハ後代ノ事ナルベシキジヤウサイハイト云ハ字音也上古ハ漢字ナシサレバ字音ヲ唱ルヿハ上古ニハナキ事ト知ベシ又今世神社一参リタル人ニ神主ガ幣ヲ持出テイタヾカスルハ心得ヌ事也幣ハ神主ノ方ヨリ持出テイタヾカル物ニハ非ズ神拜スル人ノ方ヨリ持行テ神ニ奉ル物也

六の孫ちぬさも有あへずもゆふの神のまゝにと云ニテ考ヘシ

一カキヒタシ　白柿（ハクシ）ユダカキ串カキ乾ヲ刻ミテ酒浸シタル也

菓子也昔ハ砂糖ナクテ甘キ物ハ甘葛（アマカツラ）煎ノ入タル物又ハ柿ナドヲ用也今モ堂上衆鞠ノ會ナドニハカキヒタシヲ供スル也萩原宗古説（栄花物説ニカキヒタシ見ヘタリ）

一天下治本乱本　貞丈曰治ノ本ハ在リ上恵ミ下富也富則人情正直而孝悌忠信礼義廉恥行矣乱ノ本ハ在上虐下貪也貧則人情邪曲而貪諍欺賂奪盗謟行矣富世多善人百代何違予言哉又曰富世以徳行人為賢者以謀利人為賤者也貧世以謀利人為賢者以徳行人為愚者又曰富世万民於君必信服貧世万民於君必偽服信服感恩也偽服恐威也

一惣海鞍　古作ニモ惣海ハ少キ故人多クハ見知ラ

ズ惣海ト云ハ無海ト表裏也前後輪共ニ山形ノ上ヨ
リ鰐口ノ際マデ浅ク窪リ彫也磯ナシ雉股ヨリ爪先
ニ至リテハ上ノ方ヨリ少深ク彫也輪ノ内ノ方ハ常
ノ如ク平也惣海ハ輪少薄クナルユヘ木目ノ亘キヲ
撰テ作ルナリト淨存ガ訣リキ

一あさて　古歌にあさでこぶすま今宵だに又あさでかれあづ
よめり鴨長明奥義抄にあさでかれあづまをとめの
やいしろをきてもあさでとは麻の
栞人のよめるは萩の花ずりと云書にみえたり又
堀川次郎百首に俊頼君こぞとりふのこやの床のうへに
あさでこぶすまひきてこそともけれあさでは麻なれば

欲麻津こぶすまこよひだに此は御説にはれてと言ね
かけり此御説或ハ実字にあらずして麻衣とけらり

一神通用ニハ数ヲ　荷田在満カ祝詞考ニハ弥也八ノ訓
ヲ借用也ト云ヘリ此説発明也八ツトツノ字添ルハ
悪シ唯ヤト云ベシ八目鏑モヤメ鏑ト云ベシ弥目ノ
鏑ト云事ニテ唯目ヲ多ク開キタルヲ云ヿ也八数ニ
拘ルヿカ或説ニ神道ニハヲ用ルヿハ始ノ一ト終ノ
十ヲ除キ去レバ残リハツアリ始モナク終モナク無
窮ナルヲ貴ブ也ト云ヘリ此説ハ理過テ謎ヲ解クゴ
トシ上古ニ如此ムツカシキ事ハナシ神代ノ風ニ非
ズハハ弥ノ借訓ト云ヿ甚古風ニ叶ヘリ　八雲八重垣

八百万等ノ八ヲ弥ノ字トナシテ見レバ意味八ノ字ヨリモ勝レリ又中臣祓ノ小男庚乃八ノ御耳モ八ツノニハアラズ是モ借訓ニテ弥角ト云フナリ庚ハ角アリ振リ立ハ譬喩也八坂瓊ノ曲玉ト云モ弥清光圓玉ノ略轉語也（ストサ音相通リトニ音相通）弥清光囚珠

一講頌　和哥會ニアリ講師ノ後ニ列居シテ講師ニ就テ同音ニ謡フ役人也近代年中行事正月御會始ノ条ニ云次発聲着文臺右襲次講頌輩群居後方着了安座詠進之公卿雲客自御眼路至議定所迄数多群居聽聞之次讀師取懷紙置右方取懷紙一枚越置文臺上（御前向一）（枚宛）次講師讀之一返自瑞作讀出名読了次哥自二枚目不讀端作讀名次讀哥至御製者新讀端作講了発声人発之講頌同就也云々

一鈴舟　日本紀ニ仁徳天皇幸大津侍皇后之船而歌曰那珥波譬須儒赴泥苔羅斉於朋淤赴泥苔礼　釈日本紀ニ須儒赴泥鈴船也私記曰師説以鈴鍔舟也○（源氏明石の巻に小泥ノ舟見へたりあり）

一豈ノ詞　日本紀仁徳天皇ノ皇后ノ答哥ニ阿珥豫區望阿羅儒　釈日本紀ニ阿珥豈也

一修羅車　節用集ニ修羅注云引大木材木也トアリ軍器考（巻六火器類）大友ガ家ノ事シルセル記ニ天正四年ノ頃宗麟入道ガ領セル肥後国ニ南蕃ヨリ大石火矢

来レルヲ入道ヤガテ彼国ヨリ修羅ヲ以テ豊後国臼杵ノ庄丹生ノ嶋迄引寄ヤタリ云々　楠村長高ガ室町殿日記巻二十小天狗ノ篇中大仏殿造営ノ事ヲ云ヘル章ニ云石垣ノ大石ヲ鹿カ谷ヨリ引レケルニ蒲生飛弾守兼リテ六疊敷ノ大石ヲ引ニ三千五百人力ニテヒケリト聞ユ楠木松ノ虹梁ヲ以テ修羅車ヲ造リ是ニ引ノセ道筋ニハ丸太ヲ敷テ其上ニアラメヲマカセテヌメリヲ以テヤリニケル云云今世地車ト云物ノ大ナル歟

一字音與和訓相似　気字音キ和訓ケ　蟬字音セン和訓セミ

一字音與和訓相同　菊音キク訓キク　蝶音チヤウ訓テフ　死音シ訓シ

一轉音ヲ為訓ト　蘭音ラン訓ラン　芭蕉ハセフ訓ハセヲ　紫苑音シヲン訓シヲニ　桔梗音キツキヤウ訓キチカウ　此類多シ

一吉田家神道　吉田家ハト部氏ニテ其始祖天児屋命十二世ノ孫跨耳命也遥後兼治ト云人有リ其嫡子兼英ヒデ其次子兼従ヨリト云兼従家号ヲ萩原ト称シテ両家ト成ル抑吉田家ノ神道中頃ヨリ神仏両部習合トナレリ是レ其家傳ヲ取失テ仏法ヲ取交タル也萩原兼従ノ頃ヨリカ改テ仏法ヲ交ズ唯一ノ神道トナル其従徒カ神代巻中臣抜等太極陰陽ノ消長五行ノ相生相尅ノ

理ヲ以テ説キ成セリ是ヲ理学ノ神道ト云ヒ漢土宋
朝ニ始リシ理学ヲ以テ本トシテ造作シタル物也宋
朝本朝ニテハ後鳥羽院ノ御代ノ比ニ當ルベシ宋ノ
理学ノ本朝ニ渡リ来リシハ鎌倉北条ノ季世ノ比ナ
ルベシ夫ヨリ以前ハ理学ナシ況ヤ神代ニ理学ナキ
コハ云ニ及ザル也然ルニ理学ノ神道ト称シテ神代
巻ノ本文ヲハ曲言ナリト云テ様々ノ理ヲ附會シテ
謎タトク如ク説キ成スニ秘傳口決多シ夫日本紀ノ
神代巻ハ国史也謎本ニハ非ズ何ゾ曲言ヲ用ンヤ神
代上古ノ風俗ハ万事淡リ易カニテ巧ニムツカシ
キ事ハナシト見ユ且神代巻ハ諸家ノ旧記ヲ集メノ
諸説異同アリテ孰カ実孰カ虚トモ決定シガタキニ
依テ一書曰トシテ諸説ヲ其マヽニ載テ舎人親王ハ
言モ私意ヲ加エズ記シ玉ヘリサレバ一書ノ説ノ中
ニハ実モアルベシ虚モアルベシ舎人ノ時代スラ虚
実弁ヘ知難カリシ也況ヤ後代ヲヤサレバ神代ノ巻
ハ明ナラズ只本書ノヤマトニテ文ニ随テ義ヲ説クヨ
リ外ハナシ理モナキヲ多シ強テ別ニ理ヲ造テ牽強
附會スベクラズ神代ニ文字ナシ後代文字渡リシ後
ニ書シナレバ諸説區々也神代ノ巻ハ国史ナルヲ史
トセズシテ天照大神ノ人倫ノ道ヲ教ヘ天下ヲ治ル
法ヲ傳ヘ給フ書也トシテ神道ト云一道ノ本経ニ立

ント欲シタル故其趣ニ説キ成サントテ神代巻ノ本文ヲ謎ノ如クシ仏記（経カ）ノ譬喩ノ如クシテ理説ヲ以テ曲ゲテ説クユヘムツカシク成テ其曲ゲヤウニ秘傳口決ナドモ出来タル也（頭書ニ一タビハ両部一タビハ理学如此心任セニ変改スルヿ是神代ヨリノ相兼ニ非ル證ナリ）吉田家ノ神道本ハ神仏両部習合ノ神道也後ニ改テ唯一ノ神道トナル其唯一モ理学神道ナレバ神儒両部習合ノ神道也如此ナルヿ神代ヨリ相兼ニ非ザル證也後代ノ造事也モシ神代ヨリノ正傳ニテアラバ外国ノ儒仏ノ両道ヲ借リ雜ルヿハ有ベカラズ

一 理学神道　萩原兼従朝臣門弟吉川惟足傳（上巻）曰紀伊亞相頼宣卿問云社人神ヲ祭リ所作ヲ行フヲ神道ト云リシカアレバ神道ハ所作ヲ本トスルニヤ惟足答テ云神ヲ祭リ所作ヲ行フヲハ社人ノ神道ト申シ侍リ是ヲ行法ノ神道トモ申シ侍シ（頭書行法ハ仏家ノ詞也）天下ヲ治ルヲハ理学ノ神道ト申シ侍ル吏ニ行法ヲ用ルヿ侍ラズ理学ノ本ハ国天下ヲ治ル所ニシテ所作ハ武藝也サレバ天児屋命ノ御子孫神ノ道ヲ附属シ代々政務ニ預リ四海ヲ治メラレ侍ル云々○貞丈云此説取ルニ足ラズ造言也

一 詠神歌　右同書下巻神トいふるを吉川惟足いのまどしたるしなきこそたるしなれおのが心の間こゝわく

かければ　貞よ云は吾はよくよめりれども佛説
理学などを以て神のるを極くに説きなれば誰
なしとやいはん

一義輝公滅亡　猶(楢)村長高が室町殿日記ヲ按スルニ
三好筑前守義長命ヲ奉テ泉州備前入道並同伊勢守
ヲ誅罰ス然ルニ賞ヲ行レズ義長依テ備前入道ガ闕
所ヲ賜テ従卒ヲ扶助シ其功ヲ賞セントテ所望申セ
ドモ賜ハラズシテ彼所ヲ一円ニ伊勢加賀守ニ賜フ
故ニ義長公方ノ御料所ノ代官ヲ私ニ置替テ年貢ヲ
押ヘントス公方ヨリ役人ヲ下シテ三好ガ代官ヲ追
払ハントス三好ガ家人ヲ遣ハシテ公方ノ役人ヲ追返

シ年貢ヲ押領ス依之公方ヨリ度々討手ヲ向ラル毎
度討手敗北ス終ニ三好御所ヲ囲ミ攻ム公方義輝自
殺シ給フ永録(禄)八年五月十九日也尊氏将軍ノ嫡流十
三代ニテ滅亡セリ義輝公愚弱ニ依テ也

一阿うましと云何　古語にあらましと云阿うまし
るなどいふはあらまほしきの略語なり阿うまほし
きといふは此(ガ)のことく阿りこれと稱ばひなりなりて
今語に大略といふもあらましといふはあやまりて

一軒轅氏土徳稱王　王子年於遠記曰軒轅出自有熊之
国母曰昊樞以戊己之日生故以土徳称王也云々據之
則其帝土徳某帝火徳之類以其生日之支幹称之也○

土徳火徳ナド云フ五行家道家ノ詞ナルベシ無用ノ事也

一上古之事　漢土ニテハ黄帝ノ時始テ文字ヲ作レリ黄帝以前ハ書籍ナシ故ニ上古ノ事ハ唯古老ノ談リ傳ヘ聞傳ヘノミニテタシカニ分明ナルヿハナシ談リ傳ヘ聞傳ヘハ年代ヲ経ルニ随テ談リ遠ヘ聞違覚違ヘ有ルニ依テ説區々相違アリテ疑ハシキ事モアリ怪シキ事モアル也夫ヲ正シク明メント欲スレ𪜈文字ナカリシ時ノ事ハ書籍ニ記シタル物ナケレバセンカタナクテ古老ノ談リ傳ヘ聞傳ノ後ニ後之人書籍ニ載テ後代ニ遺シタル也漢土ノ文字早ク出来シ国スラ如此況ヤ我国十六代應神天皇ノ十四年迄ハ文字ナカリケレバ其以前ノ事ハ分明ニ知レズ只古老ノ談リ傳ヘ聞傳ヘノミナルヲ文字渡リテ後文字ノハタラキヲ習得タル時代ニ至テ漸ク古老ノ談リ傳ヘ聞傳ヘヲ記シタル書諸家ニ出来タリ然レ𪜈談リ違覚ヘ違アルユヘ諸説區々ニテ同シカラズ日本紀ニ一書曰ト云テ説々ノ不同ヲ挙ラレタルハ是也然ルニ今世ノ神道者ト云輩神代ノ事ヲ近年ノ事ノ如ク我物ニシテ詳ニ明ニ説ント欲スルハ大愚ノ至リ其説聞クニ足ラズ

一晋人著書　晋ノ干宝搜神記陶淵明ガ續搜神記張華

ガ博物志王子年ガ於遺記等奇怪妖妄事ヲ載タリ又
仙人方術ノ事ヲ云其世ニ如此事ヲ好ミシト見ユ漢
土ノ書スラ然リ況ヤ我国神社仏寺ノ縁起野史俗談
ヲヤ信用スルニ足ラズ

一翔風詩妓王歌　王子年於遺記ニ石季倫ガ愛妾翔風
ト云女寵衰ヲ退ラレテ怨ヲ懐テ作レル五言ノ詩曰
春華誰不美卒傷秋露時突恫還自低鄙退豈所期桂芳
徒自蠹失愛在蛾眉坐見芳時止憔悴空自嗤此詩平家
物語ニ見タル妓王ガ歌　とゝえ出るも同じ
[illegible]
[illegible]

一常世郷　トコヨノクニトヨム常世ノ二字ハ訓ヲ借
リテ書也トコヨハトホクコユルノ略語ニテ遠越也遠
国ヲ云也トキハノ国トハ別也トキハノ国ハ日カゲノ蔓ニ記ルス　ヨトユト音相
通也トコヨノ長鳴鶏ト云モ遠キ所マデモ声ノ聞ヘ
テ長ク十リ雞也少彦名ノ命ノ常世郷ニ行玉フト云
也常世ノ二字ニ抱リ泥ミテ常住不変ノ国仙境ヲ云
トハ誤リ也我国ノ詞ハ文字ニ拘テルカハ誤ナリ

一勉強　此二字成ガタキ事ヲシヒテシトゲルヲ云也
俗ニヤウ〳〵ノ事デト云ヲヤウヤク共云テ漸クノ字
ヲ用ルハ非也漸ノ字ハスヽムト訓テ物事ノ段々ニ
進ミ来ルヲ云漸クノ字ハ俗語ニソロ〳〵ト云ニ當也

一彼是　此二字俗語ニドチコチト云ニ同ジ又物ヲ二ツ並ベテドチ（ラ）コチテガヨイナドト云ドチラハ孰ノ字也又何字也

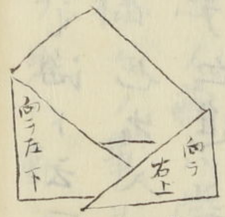
一堅塊　物ノカタクナルヲ云ハ堅固等ノ字ヲ用フベシ別々ニハナレテアリシ物ノ一ツニ寄合テカタマリタルニハ塊ノ字ヲ用ヘシ

一射工　九武藝ハ心ヲ煉ルヲ肝要トスル中ニモ特ニ射藝ハ尚心ヲ煉ルヲ至極トス夫レ心肝肺脾ヲ五臓ト云五臓ノ中ニ心ノ藏ハ常ニ静ナラズ動クモノ也益窘テアルすも様々ノ事ヲ思ヒ夜寐テアル時モ様々ノ事ヲ思ヒ夢ヲ見ル動クハ是心ノ藏ノ常ノ用

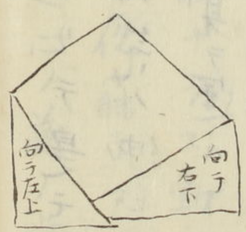
也又気ハ腑ノ下ノ気海ト云所ニアリテ是モ動クモノニテ升リ降リスルモノ也気ノ出入ル息ハ気ノ伸ビ屈ミスル也気ノ動クニ随テ血進ミテ惣身ヲ運ル丁水面ニ風吹テ小浪ノ寄ルカ如シ血ノ進ミ動クニ随テ脉跳ル也サテ心ノ藏ハ物ヨリ事ニフレテ其動キ甚過テ躁キ起ツテアリ心躁クニ随テ気躁ク気躁ケハ随テ血躁ク血躁ケバ随テ脉躁ク脉躁ケバ随テ手足惣身躁キ狂フ者也故ニ弓射ル者ハ心ヲ静メテ躁（ハヤ）サヾルヿヲ修煉スベシ心躁ゲバ気躁ギ手足惣身躁ギ狂フガ故ニ的ニ中ル射手ト云レ共責人ノ御前ニテハ今能ク中テ御目ニカケバヤト思ヒテ心躁ゲバ気脉血躁

ノニ随テ手足惣身躁キ狂ヒテ常ニ替テ中ラザル也
心ノ修煉ハ口ザ上達シタル上ノ事也口ザ未熟ニテ
ハ叶ハザルヿ也

一包状包様　包状ノ包様京都ノ包ヤウト江戸ノ包様
違アリ京都ノ堂上方ニテハ左ヲ先折テ次ニ右ヲ折
如此スレハ衣服ノ前ヲ合スル如ク順也江戸地下ノ
包ヤウノ如ク先右ヲ折テ次ニ左ヲ折レハ左マヘニ
成リテ逆ナリト云ヘリ　松葉子ニ清ミ文のそく
ひといふものなり



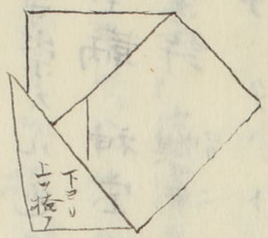
京都如此右マヘ也



江戸如此左マヘナリ

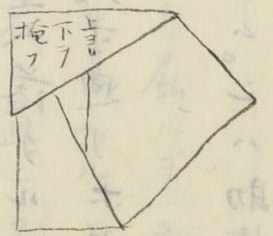
右圖ノ如シ左マヘ右マヘノ順逆ヲ云ハ誤也状ハ横
ニ置テヨム物ニハアラズ人ニ進スルニモ横ニハセ
ズ何レモ竪ニスル物也竪ニシテ見レバ

京都



下ヨリ上ヲ掩フハ地ヲ天ヲ掩フニテ逆ナリ

江戸



上ヨリ下ヲ掩フハ天ガ地ヲ掩ニテ順也

状ハ竪ニスル物ナレバ竪ニシテ順逆ヲ定ムベシ江
戸ノ包様ハ故実ニ叶ヘリ京都ノ包ミ様状ヲ横ニシ
テ左マヘ右マヘヲ論ズルハ誤ナリ

一馬頭観音　仏経ハ呉音ニテヨムコレハメヅ観音ト

云ベシ。バタウト讀ハ漢音也弘法大師モ呉音ニテ。グハウ大師ト云ベシコウバウハ漢音也冥土ヲモメウドヽヨムベシメイドハ漢音ニ馬頭観音ノ像額上ニ馬頭ヲ載タリ馬ハ馬頭観音ノ化身也トテ騎術家ニテ尊崇スル也馬頭観音ハ畜生道ヘ落タル仏歟

一 神宝鞆 神宝大神宮ノ鞆ノ大サ圍八寸廻リホド高サ二寸余許リ其形等別ニ記ス

一 但字 タヽトヨム。タヽシトモヨム。シハ助詞唯ノ字只ノ字ニ同ジ俗書ニシカシナガラト云意ニ但シノ字ヲ用ルハ誤也然レ𪜈俗文ニハ俗ニ随テ書ベシ

一 番匠 大工ヲ番匠ト云フ飛弾国ハ材木多キ所ナル故飛弾ニハ工匠多シ是ヲ飛弾ノ匠(タクミ)ト云共匠ノ者共番替リニ上京シテ木工寮ニ入テ造作ノ役ヲ勤ム故ニ番匠ト云俗ニ飛弾ノ匠ヲ一人ノ名ト覚タルハ非ナリ

一 拵ノ字 字書ニ据也トアリ手曲リ屈ルヲ云又補也ト有サシハサム也此方ノ俗ニコシラヘルト訓ミテ物ヲ造ルヿヲ拵ト云其義詳ナラズ若シ直ニアル事ヲトリツクロウ意歟古キ物語ノ書ナドニコシラヘテト云詞アルハ皆右ノ意味アリ其詞一轉シテ器物ナドヲ造ルヿヲコシラヘルト云ナルベシ俗語ニハ轉用傍通ノ詞多シ

一神代　天神七代　地神五代と云称神皇正統記神皇
実録ニ載れた上たの書ニ載し国語立ちるより伝紫
のあるをハ元代自生歟父母有し歟詳日知ぬ候
今人親王日本記ニ神代七代とだより記して天神七
代地神五代の称ハなし又其代ハ神代人代と差別
をいふ事ありそ無たもあらざし神代より以下ハ
元皇のそうをなるまゝそうを謚すらざる上世をむお
しなへて神代といふべし此を云く差別をむらべ
りしず神とまた霊妙不測の謂し

一頼朝童名　鎌倉大日記天文記之八年頼朝童名鬼武者
后二位右大将三十四歳

一義経首埋藤澤　同書曰文治五年己酉閏四月三日義
経於衣河館自害五月十三日首上鎌倉被埋藤沢東鑑ナド
ニモ義経ノ首薙沢埋事見工ズ孫説ナリ

一養育字古訓　養ノ字育ノ字ヲ古ノ訓ニヒタストヨ
ムハヒトヽナスノ約語ナリ。トナノ切カミタトナル

一ガテラト云詞　古歌ニ　我名の花見がてらゆきあり
人をちりなん後ぞ恋しかりけり　がてらハからいし
の約語なり旁の字ニカタハテトヨムモ　たとの切音
たとなりがてらハがたらしたトてト言ハ通ゆへ
称してがてらとなりしことくハ也を見るハ也とそ
もかくのまゝ名のまゝとも詩ハ俗語よいなど花

見ゝくゝかと云ふ同じかゝくハ即ち亭の字こ

一鏡面仏像現　新編鎌倉志ニ其製アリ種々ノ茶ヲ合ヤ其茶ニテ画ギテ焼キテ研クヿアリムツカシキ製也仏ニ限ラズ何ニテモ予カ考ヲ以テ生漆ヲ以テ鏡ニ仏像ヲ画キテヨクカラシテ後ニ明礬水ニ五日渡(浸カ)シテ研テ見レバ佛像明ニ現タリ簡易ニラヨシ画キタル漆ヲバ烈火ニラ灸リテ篦(ハラ)ニテ削リ落シテ研(出カ)ヤシ其寺ノ宝物也トテ鏡面ニ仏像ノ現タルアルノヲ事々シク縁起ナドヲ作テ欺クヿアリ造リ物ヽ

一為渡十高名　細川山名歴代記巻四舎利寺合戦条ニ見タル感状ノ文ニ云　去廿一日於天王寺合戦之時突太刀打出手前頭被打捕之条言共同断粉骨之働太以神妙也去年芥田川合戦以来為渡十高名都鄙是共隠上財政国別後も御忠義希代之名誉内浦山家次第以感悦之餘謹一腰左刀一腰国綱三祢左近太夫武を国ゝの人々知行不可有相違者也仍感悦件七月廿九日　於佐河内長教判　三木内近夏人をこれ在為渡十の三字。ヲキツトかなと付くるあもあり又。ウキトテツトつるを付くるあもあり何きをあとむべき歟詳ならば何きもあめ何とすゝきた此詞古代すえ例なし　東鑑保元平治物語平聖裏記平家物語古今記もなくて見えば近代戦国の時武士の

云かしていいかりけしたる俗語なるらんれ正しき詞とも寸
えば又君の威徳の外不見なし今世軍部名流君の
詞れ実ありけふ云例の妄説なるべし又云君のか
女子ハ人ゐるさきなるこ只文字のまゝなく十日流れ
とよむべし一より十までなき流り物ハ不もなき
こゝろにいふんなるべし

一 稲城イナギトヨム日本紀巻六垂仁紀云五年冬十一
月中略命上毛野君遠祖八綱田令撃挾穂彦興師距之
忽積稲作城其堅不可破此謂稲城也踰月不降○又巻
十四雄略記云十四年夏四月中略神代記ニ成田アリ将斬使主
逃匿至於日根造稲城而待戦遂為見殺○又巻廿一崇峻

紀云二年用明二年ナリ秋七月大連守屋親率子弟与奴軍築稲
城而戦

一 庄 庄ハ本字莊也俗作莊又作庄日本紀巻五孝徳紀
二年正月中略處々田莊トアリ莊ト云フ久シキ事也

一 細馬 古同紀同条ニ宮馬中馬細馬見タリ

一 刺頸死 日本紀巻三舒明紀八年春正月壬辰朔日蝕
三月悉刻奸采女者皆罪之是時三輪君小鷦鷯若其推
鞠刺頸而死○古代自殺ハ多ハ自ラ縊テ死スルヿ日
本紀所々ニ見タリ刺頸ハ右ニ見タルノミ欽紀ニ自
経ノ字ヲ用タリ自縊ナリ

一 神祇伯 同巻廿四年極紀云三年春正月乙亥朔以中臣

鎌子連拜ニ神祇伯ニ再三同辞ス不就退居ニ三嶋ニ

一林臣ハ　同紀注云林臣ハ入鹿也○蘇我蝦夷カ子也

一忌名ヲ不忌実ヲ　正月元日天子。屠蘇。白散屠蘇散ヲ召上

られ次ニ千瘡万病膏と云膏薬を以額と以耳のうし

ろに付りふすなり膏薬と云名を忌てタウヤクと

称する也江次第ニ見えたり膏薬の名をごとく忌ふ

なるは膏薬を付けるゆゑにかしきまゐらふ云実をば

用ゐて名を忌るゝは中ごのなきまゐ民間の俗に

四十二の二子ハ親を倒にとて父四十二家の年モ子二才

ゆゑをば我氏を名のらせば他の氏を子のらせ氏も

なきものは他人のみぶんなりしゆゑ作りて心やすしと云ふ

先亦かのタウヤクの数なり何としてはぎしかすとても

血脈の續き絶るすなきを氏を遣へ他人のみとよぶ

事忌なり父の四十二に子の二を合せて四四立ちと弘れり

なして忌なり物いまゝ女はさもありなん男は心の

程忌まして法ゆし

一コマルト云詞　カバマルト云フヲ畧シテカマルト

云。カトコ音直スル故カマル轉ジテ。コマルト云ナリ

文字ハ屈ノ字也事ニ當テ思案屈シテ伸ビ出ザル也

古キ物語ノ冊子ナドニ思ヒクンジテトアルハ思ヒ

タツシテト云フニテ思屈シテ也即チコマリタル支

ヲ云シ又俗語ニクツタクスルト云ハ屈着也クツチ

平

ヤリヲ誤テクツタリト云ナリ

一 唐音 五井純禎子（摂津国大坂儒士字祥甫号蘭洲）瑣語曰輟耕録曰今中洲之音入聲似平聲又可作去聲（止此）蓋自五胡之乱故（胡）人多入中洲随併陳南人又多入中洲是以言語相轉而然況元清奄有中洲之後乎今長崎人操華音者云今ノ音不与上石殊余不敢信○此説奇也予嘗テ謂フ所ト符合セリ漢唐ノ正音ハ傳ヘテ日本ニ遺レリ此論別冊ニ委ク記シヌ今世ノ腐儒ノ知ラヌヿナリト

一 生子面似先祖 右同書曰世間有生児絶不肖人面貌者蓋肖其祖先也其父亦不及知之唐蕭穎士面似八代祖鄱陽王是也○按八代ノ祖ニ似ト云フ信ジ難シ八代ヲ歴ル間ノ年数幾百年ナラン然レバ八代先ノ祖ノ面ヲ見知タル人ハアラジ若画像ニ似タル欤必ナシガタキ欤

一 騎馬 右同書孔穎達曰古人不騎馬故経典不見至趙武霊王謀胡服騎射以教百姓李牧殺牛饗士習騎馬始見於此（止此）按論語孟子反不伐章皇侃義疏曰六籍唯用馬乗車無騎馬之文唯曲礼云有車騎是騎馬耳今云策其馬不知為馬為乗車（止此）弟子傳曰結駟連騎吳起傳行不騎来據是則騎馬亦尚矣

一 白和幣青和幣 古訣於遺ニ植穀造白和幣植麻造青和幣云々穀字从楮（万葉ニ楮ヲ用ルハ楮ノ誤也ト真潤ガ説也）穀ヲユフト

ヨム又木綿ヲモ○ユフトヨム木綿ハ杜仲也和名抄
アリ楮木杜仲麻苙共ニ麻皮青ノ膜アマカハナリ白シ其
膜アルヿ相似タル者也此三物ヲ通用シテ幣作タル
ト見ユ白ニギテ穀ニ限ラズ青ニギテ麻ニ限ルベカ
ラス青皮ニテ造タルハ青ニキテ白膜ニテ造タルハ
白ニキテ也

一山海経　此書ハ漢土ノ音禹ト云聖人天下ノ洪水ヲ
治メントニノ諸方ヲ経回セラレシ時記サレシ書也ト
云傳タレ𪜈後人妄作ト見ユ西王母ノ事アルヲ見レ
バ漢ノ代ニ道家ノ説行ハレシ比ノ人偽作セシ物ト
見ユ偽書アレ𪜈古キ物ユヘ歴代ノ学者モ惑フニノ多
ク引用タリ信ズベカラザルヿ多ク見ユ

一倭文布　シヅリ布トヨム神代紀ニ倭文神建葉槌命
云々倭文神此云斯圖利我未古語於遺天羽槌雄命倭文
遠祖也識文布といへり倭文ヲ日本紀万葉集等ニ古歌ニ
多くよめり延喜式ニモ見えたりいとも上代世々の
古へ物なる事なれば古への志づたるとよめり且皇祖
の五文ある布を多くなるまゝ文の布ともいひつゝん
主文の布は釈日本紀ふりの古語於遺の文布のことを挙て
次にハ古く建久に諸祭典行之時大蔵省年預。申状ニ有
青筋文之布也とこれぞげに古へのあと覚ゆ其所とハ
何世に誇織てふ物のこゝ為なるべし云々以上ハ加茂志例が対

訓者の説を摘ミ記ス○貞丈按志所りハ其しかりの紡(ツヅ)
説しまじの二字を紡れハ音志となり(スヱノ切シナリ)又すしの
下のしトかりの上のかと合せて紡ましを音そとなり(シオノ切リナリ)
そト法ト音お遣なり也へ志ぞりを悔じて志づりと云也此紡
説のまハ意則もいまぐいもざり紡その志ぼりト云ハ白地
に青き筋を交て織りたる布なり

一 はとめてと云詞はとめてト云ハ節の字又略乃字にるを
いとうむを云又カラを入て節をハ努力の二字(ヲ)も用う
又古法にお紡のまをつとめてといふり つとと云ハ風(ヤハ)の字
又晨(ツト)の字に紡のまに其つとと云るめてと云物流をそへたる
に。たしめて。なめて。並たしなめて。たのめてなどのめてのめ

一 朝夕の説 古法にあしたと云ハ紡のまに俗に明
のまをあしたと云ハ非に明をもあしたと云ハ又古法に
もあさぐと云ハ朱のまに俗に明朱のまを申めぐと云ハ
非に明朱をハよぐといふに 田舎人の詞に明朱のまをよんぐといふ
ハ今日晨にハ古法のこりてあるも

一 折楂 古本に見つたりヲリウヅト云に 檜ノ薄板ヲ折り
曲て筥に作ルに是ハ餅数青ナドヲ盛リフタヲシニノ
四隅に作り花ナドヲ飾ル也俗に折と云モ同物に然
ルニ高橋家ノ傳ニトテ形ヲ絵図ニシテ寸尺ナドヲ
キタルアリ田舎人ノ所為ニテ余リニカタクナヽル
事ニ如此ノ雑物ニ何ノ法式寸尺ノ定アルベキヤ形
ハ四角ニモ心任ヤニスベシ蓋(フタ)モアリ臺モアリ筥ノ

身ニ合テ作ルベシ筥ニ直ニ足ヲ打付タルハ略シ此
折ウヅ一ツヲ一合ト云也折ウヅニ不限凡テ筥物ノ
数ヲハ一合三合ト云又折櫃ノ類粉ニテヌリミガキ
緑青ナトヲヌリ或ハ金銀ノ箔ニテダミ繪ガキ彩色
ナドスルハ織ラハシ古風ニアラズ食物類ヲ盛ナレ
バ白木ニテコソ清浄ナレ且古風ニテヨシ奥島ノ肉
ナト矣タルハ短キ串ヲサシテ串ノ本ヲ白帋ニテ巻
キテ餘リヲヒネリ置シコノ巻紙ノ形ニ庖丁家ニ色
々ノ品アリ此紙モ金銀紅帋ナドハ清カラズ白紙コ
ソヨラレ如此調タルハ自ラ食ニモ人ニアタフニモ
箸ヲ不用シテ串ヲ持シ御前ヘ出ニフタヲ取テ出ル

也フタハ作花ノリギノ當ル所ヲ少エルベシ フタ共ニ出スハ畧シ然レバ
作花ハフタニハサヽズ筥ノハタニサシテアル也是
モ二重筥ニシテ甚合セメノ間ニ作花ヲサスモ今様
ナルベシ作花ノ莖ヲ長クシテ底板ニ貫キ立ベシフ
タヲシタル時ハ紙ヒネリヲ底ノ下ヨリカケテフタ
ノ上ニテ結ヒ置也盛物ノ下ニハ檜ノ葉ヲカイシキ
ニス

一百敷 えゝ志きの大家とつぐきて古欲に多くしより普
通の説には禁中にハ百官の座を志く也へ百敷と云といへり
思按に志りハあらじ大宮といふ枕詞ニ百敷といふハ大家を
筥に建る紙を廣くこりあらしるをいふ也といふ也とハ云へて云

あるはあらば歳十町も多く廣きといふんとてこそと
いひしるし大家の地を廣くこそといふは中ちかり百
官の所を當にといふはまもさるまなれども大ふみと云は
ハうとく等ゆるし古語ハ爲ちかゆくむつりしきるをなく
めりなれしが爲ち則が冠詳考
一出岡が文詞 是をとゆめをこそと云それをといふをそれをと
云何ことといふと云をてふと云何ゆゑ自りといふを何とゆといふ
扶ゆ万葉より初て古き詞 抽沈ゆ体数にそれをおそなしといふ
詞もまれるハあまども毎云ニ必云ま非ズ
志れ共分ハ詞の言数あまり時ハ二云をつめて 右のめく一云に
いふるし辛なあらざる詞ハ云をはぶめていふんとも古に恥
くにはあらざるを必言つめていつるハ是をぬめるに似たり

一御字訓 オホン○ミ○又昔ニテ○ゴ○ギヨ是也 百姓 万民 同 オ
ホンタカラ御位オホン夕ラ井 又ミクラ井 トモイフ ナドノオ
ホンハ大ノ意御即位オシヨク井御元服オゲンフク
ナドノオハオホンノ略也御位ミクラ井御門ミカド
ナドノミハイミノ略也イミハ嚴也イミシキヲ云御
後ゴゴ御倚子ゴイシナドハ呉音ヲ用ユ御音ギヨシ
乗御シヤウギヨ御宇ギヨウナド漢音ヲ用ユ如此事ニ
依リ物ニ依ラ古ヨリ云ヒ訓(馴)タル詞アリ是亦名目ノ
習也理ヲ以テ一様ニ云ベカラズ我国ノ詞ハ此類多
シ漢土様(カラザマ)ニテハ合ザル事アリ又是外ニモ多シ又オ
ホンシ略シテオントモ云意ハオホンニ同じ御ノ字

ハ天子ノ事ニ限タル詞也

又下ニ記ス見合ヘシ

一シナカ鳥　万葉ニシナカ鳥井ナ野又シナカ鳥阿波
氏ツヾケタリ真図ガ冠辞考ニ級長戸邊命科戸ノ風
ナドヲ引キニホ鳥ハ息長キ故水中ニ久ク在ナドノ
説落着セズ詳ナラズ或説ニ尻長鳥ト書テ尾長鳥シ
トイヘ氏井ナ氏アハ氏ツヾクルニ由ナシ一説ニ馬
ヽ猪ヽナドイヘ氏獣ヲ鳥トハイカハ上古也トテモ
取タガフベカラズ外ニ正説アラン啟発ノ期アルヘ
シ　那木平之正ヲ[illegible]
多ニハアラジ階香取ト記ニ書タリ

一計會　古キ俗語也事ノ彼ト是ト云ヒ合セタル如ク
一度ニ出合ヒ来ルヲ云

一屈系　保元物語ニ為朝カ鎧ノ名所ヲ云タル所ニク
ツケイト云フアリ未詳新撰類聚往来　慶安元年板行二冊アリ古キ
書シ正覚国師芳四世仏陀院ノ丹峯和尚撰トアリ年月ハナシ鎧ノ名所ヲ書タル所ニ
モ艸摺○綿紙○相曳○屈系○弦走トアリ保元物語
ノ京師本杉原本等ニ八郎為朝ガ兄義朝ニ對テ弓ヲ
引ク詞ヲ畫タル条ニ御鎧ヲバ八龍ト見申ラ候譬イ
カナル御鎧ニテモ候ヘ二ノ矢ニ於テハ申請ンズル
ニ候矢坪ヲサシテ承リ候ハン真向御頭骨ハ恐モ候
クツケイ弦ハシリ障子ノ板脇立ノ上爰ヲ射ヨト承
テ仕候ハン○又同二本共ニ悪七別當クツケイ射サ
セテ落ニケリ云々今按古制ノ鎧ハ左脇ニ蝶ツガヒ

ナシ前ヨリ左脇背ノ方マテ連リ継キタリ左脇ハ脇
筋ノ形ニ随テ札屈リテ前後ヘ連ナリ継キタレバ左
脇ヲ屈継(クツケイ)ト云ナルヘシ左(右)脇ニハ脇肩ヲ當ルシ又系ノ
字玉篇ニ継ミトアレバ屈系ト書テモ同意也
一ツマト云詞　衣ノツマ軒ノツマ扇ノツマナドノ。ツ
マハツマリト云ヿヲ略シメル也。ツマリハ。ツキキハ
マリ(尽極)ヲ畧シタル語シ物ノ形ノ尽キ極マル所ヲ
○ツマト云即チ端(ハシ)ノ事也
一袖袂訓　ワデハ衣ノ字ソト。ヨム也袖ハ衣ノ手(ニノ)也タ
モトハ。タマト也。タハ手也。マトハ。マトフ也手ニ纏フ
所ナル故タマトヽ云ゼトモ音相通ナルユヘタマ

トヲ將シテ。タモトヽ云シ
一人麿画像彩色　土佐家ノ人麿ノ画像ノ彩色直(ナヲシ)衣ノ
惣色ハウス青クシテアリト袖ノ端ハ半幅ハ白シ是
ハ白キ直衣ニ縹(ハナダ)色ノ裏ヲ付タル也裏ノ色表ニ双(ヌ)キ
トホリテウス青ニ見ユル也ヱリハ表ヲウラヘ折返
シテ縫フユヘ裏モ白キガスキトホリテ表モ白シ袖
モ端袖(ハタソデトヨム鰭袖ト書ハ誤也袖ロノ方ノ半幅ノ事シ)モ表ノ裏ヘ折返
シ半幅ニシテ縫フユヘ裏ノ白キガ表ヘ双(ヌ)キトホリ
テ表モ白ク見ユル也是高倉家ノ門人橘嘉樹カ説ナ
リ。貞丈云土佐家ノ人麿ノ像ノ烏帽子折レテ前ノ
方ヘ上ノトガリ出テ柔ナル躰シ鳥羽院御代衣文ト

云フ始リテ強裳束ニ成リ冠烏帽子モ紙ニテ張リ又
キニシテ堅クナリタリカノ画像年齢五十バカリ髪
髭黒クシテ少白髪交リタリ又云人麿ノ像ヲ白髪ニ
画クハ栗田讃岐守兼房ト云人ノ梦ニ見シ形也其事
ハ十訓抄古今著聞等ニ見タリ梦ハ正躰ナシ古人ハ
愚ニテ夢ヲ信ズル人多カリキ若シ人麿ヲ梦ニ女ノ
形ニ見ハ女ニナシテ画クベキ事ヤ夢形ハ不可信也

一 玉来 続日本紀曰神亀三年九月庚寅内裏生玉来勅
令朝野道俗等作玉来詩賦云々伊藤長胤東厓ガ秉燭譚
事文類聚ニ宋宣和ノ時ニ王将明ト云者ノ家ニ梁ノ
上ニ霊芝生タリ帝其宅ニ臨幸セリ其時橘雨ノ時分

ニテカノ芝地ニ落ケリ當時京師ニ毎名氏アリテ十
七字ノ詩ヲ作リテ是ヲ嘲テ曰桓公新賜箋梁上生芝
草為曷脱玉来膠少トナン又増續韻府皓ノ韻ノ所ニ
モアリ然ハ玉来ト云モノハ霊芝ノ一名也必古典ニ
此名アラン今世通行ノ書ニハアラハレ匹ト云ヘリ橘
嘉樹曰事文類聚ノ唐本和本共ニ見ル増続韻府モ和
本唐本ヲ見ル其外天中紀五車韻瑞佩文韻府等モ各
唐本ヲ見ル又事文類聚ヲ約畧セル事類全書ト云書
ヲモ見ルニ右乗燭譚ニ云ヘル故事ヲ載テ十七字ノ
詩モアリ然ルニ何レノ書ニモ為曷脱下来ルトアリ
テ玉来トハナシ脱下来ニテハ句調レリ脱玉来ニテ

ハ句不調也」以上ノ嘉樹ガ考書ヲ摘テ記之貞丈曰右嘉樹ガ説能研
究シタリ長胤カ説誤レリサテ玉来ト云物ハ何ゾト
云フニ知レズ爰ニ貞丈毎據ノ時推アリカノ内裏ニ
生セシ物ハ蓍艸ナラシ蓍ノ事ヲ記スニ拾七本ニシ
テ筮木ト書テアリシヲ轉寫ノ誤ニテ玉来ト写シ違
タルナルベシ筮木ト玉来文字相似タリ

一霊芝　本艸綱目芝栭類芝ノ條下ニ時珍嘗テ疑芝乃
腐朽餘気所生正如人生瘤贅而古今皆以為瑞草又云
服食可仙誠為迂謬云云貞丈曰此時珍説愚意ニ適ヘ
リ凡道家者流丹葉服食類皆常ノ食物ニ非ル物ヲ服
食スルヲ以テ不老不死荘健軽重ノ術トス妄誕ヲ以
人ノ生命ヲ害セン可恐勿用

一中古以来書　我国ノ俗書ハ詞ヲ本ニシテ文字ヲバ
書訓ヲ借リテ書タルヿ多シ唐櫃ヲ辛櫃ト圭キ行器
ホカヰ ヲ外居ト圭キ頸圖ヲ首紙又首上ト唇キ蒲
葵ビラウ又ビリアウヲ檳榔ト書キ薄青ヲ薄襖ト唇キ矢官ヲ
弁官ト書キ参議ヲ三木ト唇キ姓カバネトヨムヲ尸ト書
髻ヲ本鳥ト書キ狩衣ヲ雁衣ト書キ竹尺タカバヤリヲ鷹
秤ト書キ五倍子ヲ附子ト書鋏鬻ヲ金ト唇キ白張ヲ
白丁ト書キ凡帳ヲ木丁ト書キ衣ヲ絹ト書タハ類多
シ心ヲ用テ見ヘシ

一ハヤメスト云詞　モテハヤス。取ハヤス哥ヲハヤスホ

メハヤスナドノハヤスドニハ。ハエサセルトニヲ也。
ハエ花ノエフバエ。色ノハエアフ。衣ノキバエナトノ
ハエニ同ジ。ハエハ堂ノ字ニシガタ所ヨム字ニテ玉
ヲミガキテ光ウルハシキヽハエサスルノ五言エサ。
ヲ約レハ音ヤトナルスルノスナリ切如此。ハエサスルノ五
言ヲツヾムレハハヤスノ三言トナル也

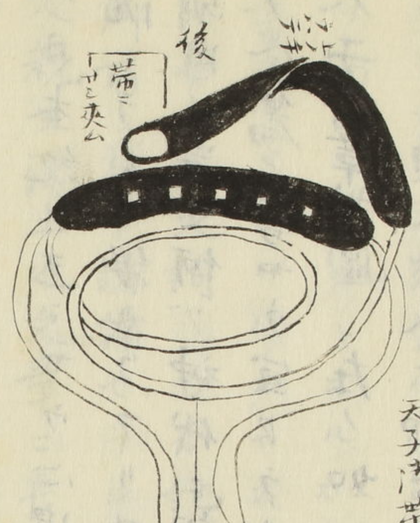
一日本書紀文詞　日本紀ハ皇朝ノ書籍ノ第一ニシテ
御前ニ於テ講讀セラレ貴重盛ナル者也其文詞ハ舍
人親王漢土之文章ニ長ジ博学英才ノ餘リニ漢土ノ
書ノ故事成語ヲ以テ我国上古之事ヲ漢土ノ文章ヲ以
書タマヒシ故我国ニ上古無カリシ事物モ。有リシガ
如ク紛レテ惑フ事アリ此其瑕也古事紀ノ如ク文詞
飾ラズ正直ニ書タマフベキ事ナルヲ可惜々々サレ
バ日本紀ノヨミヤウ心得テヨマザレバ文字ニ拘リ
泥ミテ幾ヲ誤ルコトアリ○神代記ニ胡床アリ胡床ハ
胡国ノ器ヽ何ゾ神代ニ胡器ヲ用ルコトアランヤ是ニ
テ全篇ノ書ヤウ宜カラザルヲ推考フベシ

一天子御草帯圖　左ノ如シ

貞丈云天子御帯無文巡方ナリ装束諸抄ニ見タリ
高倉家門人橘嘉樹ガ談ニ天子ノ御草帯ハ諸臣ノ
所用トハ異也此圖ノ躰アル物ヽ是古制ニテ唐風
アルベシト云ヘリ今ノ上手ハ裾ヲカリルノミノ

用ヒ此圖ノ躰ハ帯ノ巻トソノシマリ也古画ノ小野道風ノ像ナド此躰ト見ユ古ハ天子ニ限ラヌ歟

一天子御草帯圖　左ノ如シ



貞丈云
天子御帯会文巡方ナリ裝束諸抄見タリ
高倉家門人橋茹樹ガ談ニ天子ノ御草帯ハ諸臣ノ所用トハ異ニ此圖ノ躰ナル物ナリ是古制ニ二ノ唐風ナルベシト云ヘリ今ノ上手ハ裾ヲカクルノミノ用ヒ此圖之躰ハ帯ノ巻トソノシマリシ古画ノ小野道風像ナド此躰ハ見ユ古ハ天子ニ限ラヌ歟

一裾　裾ハ本下襲（シタカサネ）ノ尻也上古ハ纏着（サイシヤク）ロツカバカリニ地ニツクシ云ニテ長ク地ニ曳クヿハナカリシカ後代大臣ハ一丈四五尺其以下モ准ジテ長ク曳リヿニ成リシ也下襲ヨリ続キテ長ク曳ケバ下襲ノ領下ヘ引キツラレテ悪キユヘ別ニ切リ離シテ用ル也是ヲ裾ト名付

一成柄　建武年中行事春ノ除目ノ章ナリガシトモ云ヘリ

あり傍注ニ成柄トアリ谷村光義カ首書ニ一作成束トアリ按ニ柄字ヲカラトヨムベキヲ誤テ。ツカトヨミテ束（ツカ）ノ字ニ書替タル也なりハ成ニテ官ヲ任シタルヿヲ云カシハ殻（カラ）ノ字ニテ貝ノカラ卵ノカラナドノカラニ同シ諸人ノ申シ文（フミ）ハ。モハヤ官ヲ任シ成シタ

レバ其申文ハ。カラニナリタル意也今モ聿簡ノ用支調タル後ニ文(フミ)カラト云ニ同ジ

一モハヤト云詞　俗ニハ最早ト書也俗ノ通用ニハ是ニテヨン本字ハ既ニノ字又已ノ字也二字共ニスデニトヨム。モハヤノ義ナリスベテ俗語ト雅語ヲ兼ゼザレバ古書ヲヨミテノ義ヲ取違ルユヘ所々ニ俗語ヲ記シ置ナリ

一スデニト云詞　ホドンドヽ云詞　スデニト云ハ右ニ云如クモハヤト云フ義シ俗ニスデニ川ヘ落ントシタリナド云ハ非シホトレド川ヘ落ントシタリナドヽ云フハ本語也ホトンドハ古書ニ〻ホドホドヽアリ殆ノ字ヲホトンドヽヨム殆ノ字アヤウシトヨムシ俗ニアブナクト云フニ同シ

一スコブルト云詞　俗ニモヒカトヘニト云ニ同シ偏頗トツヾク字シ頗スコブルトヨムナリ

一トテモノ事ニト云訓　請益ノ二字シ迚ト云ハ俗ノ造リ字ナリ

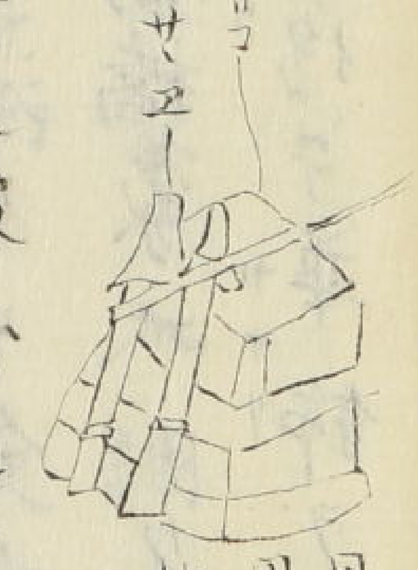
一国造(ミヤツコ)之號永停止　三代実録巻五清和天皇貞観三年十一月辛未朔日辛巳紀文曰孝徳天皇世国造之号永従停止ス

一放免(ハウメン)　検非違使廳ノ下司(ゲス)早賤雑役者也是ヲ放免ト号スルハ賀茂ノ祭ノ日鉾持ノ役ヲ勤ルヨリ常

ノ号ナリシナルベシ江談抄曰隆家卿問斉信卿云
放免着用綾羅錦繍服為検非違使供人何故哉戸部答テ
云非人之故不憚禁忌也云ト貞丈云非人トハ甚賤シ
メタル詞ニ至極ノ下司ニテ人ニ非ル者ナレバ美服
ヲ憚ラズ放免ホシイマヽニユルストヨム見祭ノ日
バカリノ変之是ヲ推テ常ノ号トモナリシナルベシ
平家物語方使ノ二字ヲ用タルハ例ノ借リ字ナリ
一ワリゴサヽエノ 清石山寺縁起ノ絵ニ見タル如シ

破子篠枝

ワリコハ破子又破籠ナド書ク檜木ニテ折曲テフタヲ一枚板ニシタル白木ノ薄板ナル箱ニ食物ヲ入ル其日限ニ用ヒテカケナガレニ捨ルト
サヽエハ篠枝ニテ青竹切テ節ニ酒ヲ入テ口ニセンヲサシ紙ニテ頭ヲ包ナリ
後代ハワリ子ヲ不入シテ弁当箱ヲ用ユルト 又サヽエヲ



用シテスイ筒又ハ徳利ヲ用ルト又ワリ子サヽエナド用時代ハ食モリ酒ヲノムニモ土器ヲ用ルナリ 古代ハ質朴ニテ清潔ナリ

ワリコハ破子又破籠ト書ク檜木ニテ折曲テフタヲ
一枚板ニシタル白木ノ薄板ナル箱ニ食物ヲ入ル
其日限リニ用ヒテカケナガシニ捨ルト サヽエハ篠
枝ニテ青竹ヲ切テ節ニシテ酒ヲ入レテクチニセン
ヲサシ紙ニテ頭ヲツヽムト 後代ハワリコヲ不入
シテ弁当箱ヲ用ルナリ 又サヽエヲ不用シテスイ筒
又徳利ヲ用ルト 又ワリゴサヽエナド用ル時代ハ
食ヲモリ酒ヲノムモ土器ヲ用ル 古代ハ質朴ニテ
清潔ナリ

一食器　古代ハ食物ヲ土器ニ盛ル也是一度用レハ其土器捨ルニ清潔ヲ貴ブナリ其食盤モ檜ノ白木ヲ用ルニ是又一度用レハ其食盤ハ捨ル也是亦清潔ヲ貴ブナリ後代ニモ式正ノ時ハ盤土器ヲ用レ凡土器モ盤モ金銀ノ箔ニテダヒ紺青緑青其外色々彩色ヲナヤリ是古代質素ノ風ニ違ヒ清潔ヲ貴ブ本意ニ背ケリ色々ノ具ニハ青物モアリヌ膠水ニ和シテ彩色スレハ清カラズ毒ノ恐モアリ折櫃ナドモ白木ニテ彩色セザルコソ清ケレ今ハ禁中ヘ献スル折櫃ナド彩色ヲ用ラル高橋家ナトガ故実ヲ取失タルニ此一事ニカギラス奢侈テ華飾ヲ専ニシテ古実ヲ失ヒ本意ニ違フヿヲヽシ

一入調（ジユシヤウ）　楽家ニ入調ト云ハ手法也琴ナレバ其琴ノ曲（キヨク）ノ手也弾物ニモ吹物ニモ撃物ニモ曲ニ依テ手アリ今俗ニ三絃ノ手ト云ニ同シ歌物ニテハフシヅケ也○譜ト云ハ手ノ図也其手ヲ覚ルタメニ合文ノ形ヲ書タル物ヲ云也

一正八幡宮　古キ軍談ノ冊子等ニ武士ノ誓詞ニ正八幡宮モ照覧アレト云語アリ八幡ノ本地ハ阿弥陀也ト八幡大菩薩ト号スルニ依テ神ト仏入交リ紛ラハシキユヘ本地ヲ去テ正真ノ八幡大神宮ト云意ナルベシ観音ハ三十三身ニ変化スルト云ニ依テ変化セ

ザル時ノ正躰ヲ正観音ト号スルニ同ジ

一署名ヲ用官位ノ唐名ヲタトヘバ天正二年ニ書キタル書ノ序跋ナドニ天正二年ト記タルヲ見レバ日本ノ年号ナルユヘ日本人ノ書タル物ト見エル其年号ノ下ニ黄門侍郎ト書タルヲ見レバ漢朝ノ人ノ書キタル物ト見ユ日本人ガ漢人カ疑ハシ且漢ノ代ト天正ト大キニ時代違也此外兼官多キハ唐ノ代ノ官号モアリ宋ノ代ノ官号モアリ漢ノ人カト思ヘバ唐ノ人也唐ノ人カト思ヘバ宋ノ人也年号ハ日本ノ年号也甚疑ハシキ人也我皇朝ノ人朝廷ノ官名ヲ捨テ外国ノ官名ヲ用ルハ外国ノ臣トナルニ同シ我朝廷ヲ蔑如(ナイカシロ)ニス

ルニ然レ𪜈古代僧尼ニ賜タル度牒ヲ見レバ廷臣ノ連署皆異朝ノ官号ヲ用タルアリ上古ニハナキヿ也中古以来ノ事ナルベシ朝廷衛乱タルヿヲ知ヘシ

一素絹衣　僧衣ニ素絹ノ衣ト云ハ織文(モニ)ナキ常ノ絹ニテ縫タル僧衣ノ惣名也素ハ白キ義ニ非ズ織文ナキノ義ニ高位ノ僧ハ文紗文羅ナドノ衣ヲ着ル也ソレニ對シテ文ナキヲ素絹ノ衣ト云是惣名ナレ𪜈後代ハ織文ナキ絹ニテ縫タル裘代或ハ裘袋ニ宮躰トモ書クノ事ヲ素絹ノ衣ト云習ハセリ素絹ノ裘代ト云ベキ事ニ素絹ハ裘代ノミニ限ルベカラズ又裘代ニハ卫リ立卯リ素絹ノ裘代ニハ卫リ立ナシ素絹ハ裘代ノミニ不可限

海人藻芥云
無絹衣者山門
三井寺方用之
無裁袖単衣
之云々無絹素
絹同之袖ハ直袖
之文端袖とし云

エリタテヲ僧綱領(クウクヒ)ヒ云(クビトヨム エリノフシ)

如此也

毎人藻芥云廉絹ノ衣者山門三井寺方用之毎機袖単衣之云々廉絹素絹同シ機袖ハ耳袖之又端袖トモ書ク

一器物古名副新称ヲ　譬ハ古ニ的ト云シ物ヲ後ニ小的出来シニ依テ古ノ的ヲ大的ト云古ハ木弓ヲバタヽ。弓ト云シヲ後ニ木竹合タル弓(ヘヽキ弓ト云 謎木弓ト昏リ)出来シニ依テ木弓ヲバ丸木弓ト云古笠掛ト云シヲ後ニ小笠掛出来シニ依テ古ノ笠掛ノ事ヲバ遠笠掛ト云如此ノ類尚多カルベシ後ニ出来シ物ニ依テ先ニ有リシ物ニ称(トナヘ)ヲ副ヘ加ヘテ差別ヲ云ヒ分ル也当将軍ヲ御所様ト云ニ依テ先ノ将軍ヲハ大御所様ト云フモ同意ナリ

一種子島銕炮　種子(タネガ)島ニテ鉄炮ヲ製シ始シ事南浦文集ニ委ク見タリ始ハ筒底ヲ子ヂニスル様ヲ知ラズシテ唯底ヲ塞タルシ此事モカノ文集ニ見タリ薩摩人丹生弥兵衛惟好カ談ニ今庶児嶌城下ニ昔種子島張ノ鍍炮ヲ持傳タル者聞々有之其筒ノ底子ヂニ非ズ作リ付ニ張塞タル者也ト云キ

一根矢　今ノ世ノ武士根矢ト云ヲ何物ソト思ヘバ征矢鏑矢雁股ナドノ類ヲ云シ又征矢根矢ト並ベテ云フ人モアリ是ハ征矢ノ外鏑矢雁股ナドヲ根矢ト云歟然レ𪜈根矢ト云名目古ヨリ曾テナキ唱シ武士タ

ル者武器ノ名ヲモ弁ヘ知ラズ根矢ナド云ハ浅マシ
ヒ事ニ常ノ心ガケモ思ヒヤラレテ傷マシキ也

一用膠　膠ヲ用ルニ硼砂ヲ少交レハ強ク子バリテ物
ヲ継合スルニ離ルヽコトナシ又漢土ノ骨ニ漆膠ト云
コアリ膠ヲ推シ交テ用ル欲用テ試ベシ

一陪従　ベイシウトヨム賀茂八幡春日ナドノ祭ノ日
勅使ヲ連レテ舞人歌人楽人其社ニ参リテ哥舞アリ
舞人ハ近衛ノ将曹府生也其舞人ニ従琴弾笛吹歌人
ナドヲ陪従ト云舞人ニ陪リ従フヲノ美也東遊求子駿
河舞人等ノ哥舞アリ

一浅黄色　延喜縫殿式部染部ニ深黄浅黄アリ共ニ荊

安草ヲ以テ染之黄色ノ深キト浅キト也サレバ浅黄
ハ黄色ノウスキ也後代ウス青色ヲアサギト云テ浅
黄ノ字ヲ用ルハ誤也縫殿式浅縹ハウス青也ウス青
ノコヲアサギト云ニハ浅葱ヲ用ベシ葱字ヒトモジ
トヨム葱ノ葉色之浅キ之無品親王ノ黄袍ノ説浅黄
ヲ以浅葱ト治レタル古例アリ

一蝶鴿紋　京都将軍時代ニ書タル武家ノ記録ニ判官
検非違ノ判官又弾正ノ官ニナリタル人ハ直垂ノ紋ニ蝶鴿
テウコヲトヨムヲ付ルト云ヘリ室町記宗五大双紙等ニ見ヘタ
リ天正十四年ノ写本ノ節用集ニモ四判官佐々木中条赤松小松
故何レモ蝶鴿也トアリ又長谷川宗仁聞書弓馬ノ聞書シヨ

蝶鴿ノ鴿ハ法ゼ先ヲモハ多しといへり此説ニ據テ
考ルニ蝶鴿ト云故ハ今世ニ云所ノ蝶鳥（テフトリ）と云故ニ其
鳥の形つゞめる似たるゆへに法ゼめるてハなしと
ことなりこゝろ鴿ノ字ハ鷓鴣（シヤコ）ト連子用ル字
ニテ唐鳥ノ名ナリ何ノ故ニ因テ彈正判官ニナリタ
ル人蝶鴿ノ故ヲ付ルヤ詳ナラズ裝束ノ諸抄ニモ其
事見エズ京都將軍時代ノ武士ハ武家ニ在ナガラ官
ニ依テハ禁中ノ役ヲ勤ルモアリ彈生（正）判官ナドハ禁
中ノ役ヲ勤シナレハ蝶鴿ノ故モ私ノ好ニテ付シニ
ハアルベカラズ必其故アリシヿナルベケレ氏詳ナ
ラズ又公家調度扇ナドノ繪ニ蝶鳥ヲ用ルヿモアル

故欤是モ詳ナラズ蝶ト鴿ト一具ニツガヒタルヿモ
イカナル故ゑ是モ詳ナラズ
一気色（キシヨク）并目（モク）　古書ニ気色（キシヨク）ス気色ヲ伺フ気色ニ随フナ
ドヽ云フヿアリ気色トハ人ヲ使（ツカ）フニ言語セズシテ
顔ヲ以テ使フヲ云或ハ目ヅカヒシ或ハカヘリ見或
ハウナヅキ或ハ頤（アゴ）ヲサシムケナドシテ意ヲ知ラセ
使フヲ云也又目（モク）スルト云ハ目ヅカヒニテ意ヲ知ラ
スルヲ云フ之又天機ヲ伺フト云ハ天子ノ御気色ヲ
伺フヲ云也天機ヲ天気ト書タル書モアリ理ハ通ズ
レ氏天機ト書クニハ如（シカ）ズ天子ヲ貴ブ詞之機ハカラ
クリノガアヒ之機嫌ト云フハ即チ此事之嫌ハウタ

ガハシリニ測知レザルシ

一挿頭花（カンサシノハナ）　建武年中行事ニ八幡臨時祭条ガざしハ巾子（コジ）のまへ
あげ緒（緒）のちがひ〻ゝ事を見てさすもきなるあれバ〻ぐ
とゝ〻ゑまつゝさしむあげをのさ紀まちをハひがとゝ
一サスト云字　西をはしてゐ又人をさすなど指字也ユビサス
ノ義ナリ使をさす夫役にさしるゝなどハ差ノ字シツカハスノ義シ矢を
偏にさゝ刀をさす并をさす柳をさすつキサシ扇を
さゝ挿ノ字也サシハサムノ義ナリ串をさゝさしゝかすさしこむさし
ゐらせ却しハ刺字シ突トホスノ義シ盃を人にさゝ頃と云ハ擬
字なりさしあひさしつゝえるものさしハ障ノ字シサヘハルノ義シ
さしゝさしこゆさしまゝぐなどのさしハ差ノ字ニテ

只訶シ如此若なかれとも若の俗用にハ差ノ字ニテ
も指の字ゝれも俗にさゝがれて用ゆべし本字をバ知り
ゐべし○又云日月ノ影サスハ映ノ字ナリ傘ヲサスハ捧ノ
字シ捧ハサシアゲル也
一御引直衣　主上の御服シ御直衣臣下ノ如シ　に紅の張袴
女房の袴のめし　をめすを御引直衣とも御下ヶ直衣とも云ニ糸
裝束抄元三光院内府記　袴抄にもあし
とそ也
一薄色濃（コキ）打　裝束の色ニ薄色と云ハ緯紫経白ヲ以テ織
タルヲ云フ其色ウス紫シ濃打ト云ハ蘇芳染ヲ甚タ濃
クシテ黒クナリタルヲ砧ニテ打タルヲ云其色黒シ今

ハ蘓芳ヲ不用シテ黒染ニスルナリ

一文字 尺丈字本ハ點ナシ俗書ニハ點アリ點ナケレハ文書ノ文字ニ紛ルヽユヘ點ヲ加ル也珠玉ノ玉ノ字本ハ點ナシ中ノ一画ノ正中(マシナカ)ニアリ帝王ノ王ノ字ハ中ノ一画上ノ画ニ近シ王(珠玉キヨク)王(帝王ワウ)如此紛レ易キ故珠玉ノ玉ニハ俗ニ點ヲ加ヘテ分ツ之是同例之

一惣字 摠ノ字ノ俗書也オヲ牛トナシ囱ヲ勿トナシ心ヲ下ニ大ニ畫タルナリ

一琉球人称日本ヲ薩摩人北郷氏丹生氏両人共ニ談テ曰琉球人日本国ヲ称シテ。ヤマトヽ云ト 貞丈云我国名ヲ常ノ詞ニ。ヤマトヽ称セシハ我国ニ於テハ至テ上古ノ詞之後代ニハヽニツホント称セリ然ルニ今琉球ニテ。ヤマトヽ称スルハ薩摩ヨリ彼国ヲ征伐セシヨリ以来ノ詞ニテハナク上古ヨリ彼国ニ云傳タル詞ナルベシ彦火々出見ノ尊ノ塩土翁ノ導ニ随テ海宮ニ入リマセシト云ハ琉球ヘ渡リタマヒシヲ云ナルベシ日本紀記ノ一書ニ木花開耶姫(瓊々杵尊ノ御子ニテ天忍穂耳尊ノ妃ナリ)ノ火明(ホノアカリ)余火酸(ホノスセリ)芹余火(ホヽ)々出見尊等ヲ産タマヒシ時竹刀(アシヒユト云)ヲ以テ其児ノ臍帯ヲ裁(キリ)其竹刀ヲ棄シ處竹林ニ成ル彼地ヲ号テ竹屋ト云(竹屋ハ今薩ノ阿多郡鷹屋ノ又日向ノ肝付郡鷹屋ト云處ナリ)又火々出見尊崩タマヒテ日向高屋山上ノ陵ニ葬マツル又瓊々杵尊ヲ日向襲之高千穂(ホノタカチカ)

櫶日二上峯ニ至ルナドヽアルハ皆今日向国ノ地名也日向ヨリ琉球ハ向寄ノ国ナレバ出見尊ノ海宮ニ到リマセシト云ハ琉球ノ事ナルベシ其貶代ヨリ日本ニ通シ始メテ神武天皇大和ニ都シタマヒシ以来我国ヲヤマトヽ云フヲ聞傳ヘテ彼国人ヤマトヽ称シタリシヲ改ズシテ今ニ至ルマデヤマトヽ云習ハセルナルベシ

一蠟燭　太平記巻四俊明極参内ノ條ニ夜半ニ蠟燭ヲ傳ヘテ禅師被参内云々右忠寄考也蠟燭ノ名和名抄ニアリ今義解主殿寮ニ油火ヲ為燈蠟火ヲ為蠟トアリ是職員令主殿寮ノ條ニ燭燃トアル義解也ラウソク上古ヨリアリ

一印花布光輝　柿渋ヲ引ニテ蒸シ其精液清澄ニナルヲ取テ阿蘭陀ノサラサニ引ク也故ニ光輝アリト忠寄ノ談也阿蘭陀ノ彩画ニ光輝アルモ是ナルベシ試用ベシ

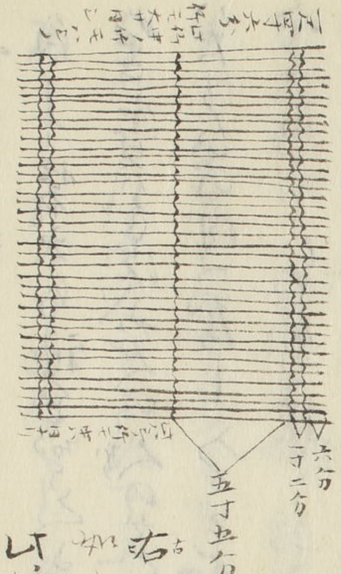
一帛御装束　建武年中行事六月十一日御神事いぬのさらじ見ゆ御たくれ御装束をこてかつる内裏察てうぢ夏ましゝ名ハ移る

一兼塵　建武年中行事神今食神嘉殿のひさしより入ヤ入ふ大床子の御座まつりせらぢんなりて白木の大床子なり。和名抄云釈名云兼塵施於上兼塵土也右見于屏障具敷障行屏風兼塵ト列シタリ居宅具ニ天井

見タリ兼塵ハ天井ノ事ニアラズ

一帛御裝束　右同書同条　其後（私注御湯の後ナリ）帛の御裝束を以
内務寮のゝてまつりをぬげ給ひもばせ給ふ敬
察の奉事をうるはしき衣服にはかへてまつるなり（これは衣も）
なり○此次左の御幘文ツリ
一御幘（右ノ次）文　内務寮のゝてまいり御幘を御冠の巾子の
根よりむすぶゝかぎなり御纓の下よりまへにしたし
御冠の後に帯の文の巡方うちうくゝ御用にあるし江次第
曰童帝無供幘之儀
一あまの羽衣　同書同条　御衣（御衣）丹（木ニシ）ぬりぐし（めりぐし）丹の中ゝぬき
給ふひさこをんしてあまの衣（をいかし）

もれて下へ垂ぬらるゝいまし
ものゝぬきすいゝありけん
ちかき比は桃園院太掌舎の時用られしぬき
簀を見しに行を九く削りハ十五なりしべて白き絹糸の
四角を以て又所あるなり竹の長サ壱尺四寸六分大サ径
壱分半也

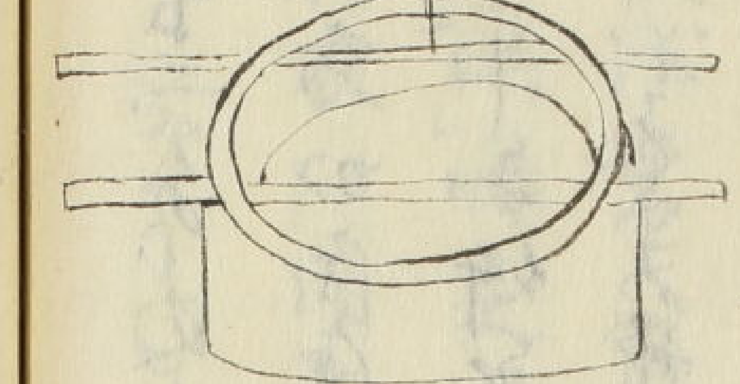


簀ヲ竪ニメ置シ

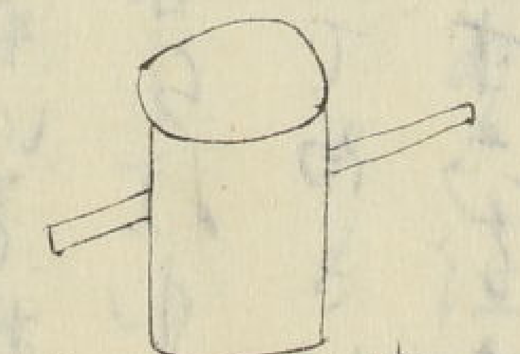
簀又ス竹の色ノ径シ
アミヤウ如此四筋ヲ糸ニテカケル
イトハヨリ糸シ

右の雜具も後代ハ法式あるべし
如し
此折簀を角たるひの上に打かけ

ふる古ハ角たらひの角を手洗ふ人の方にむけて置し
角より紫宸乃神をおそるゝとかや
ぬき貫ハ手洗ふ人の方をたらひのふちにかけて一方
いたらひの内へ落し 今ハ是古風にて水の向へ流るゝ為なり
今ハ角たらひの角を横にして貫も横にして右揃とするなり
ひのみちにかけて置し古風ハ両方をもと合の風ハ右揃なる
かゝる事有違ふなり又云古のたらひハ曲物ニ角をつけたり



此角ノ方ヲ手洗フ人ニ向
手洗ふしてうかしめに
ふ木を貫たる御手水
の内にあるハ木かさし



内ニモブタキ
ドヨスロサ
キ水ハ出スハ
又ハミサレハ
半挿ニ
和名抄ニ
見

一主上著御指貫并沓 建武年中行事云丑の日五節舞
姫まゐる(中略)主上ゆかつけし御指貫にて御沓をめさるゝ
こゝハ此時の外ハなし但御鞠の時も帳臺ノ試ノ准じ
めさるゝなりまた負丈云 左にハ紅の袴(女袴はすなり)をめを
こされたる御沓ハめさず 袴をぬきて御束帯の御礼服ニハ
御沓めさる(又大槐秘抄ニ委クアリ)
一刀乃忌と 奈佐氏哨 衣笠内大臣 何とやらんまありとも
きいふ忌とのうちにも かさうめハうちに紀 権僧正公朝
よみたりし人をよんでふいかぐうのとのうちらぬ刀かさ
ねしとありける刀の忌とと云はいるよ 若日人のさむ時ハ
くちびる開るものとされなむさし読のたよりとの中

こゝくたたひきくさかゝ又たたたくあるまそのひ
きくして又こゝくなりと思ことゝいふし是をおしてふ
刀の意といふ刀の樋のまゝなるべし

押出 ヒヒヌイ ヨウ見

一押出 建武年中行事 賀茂リ ジノマツリ 中宮のぐしせなくハうへ
の局のおしおしひりのまゝ 貞丈云押出トハ晴タル日女房ノ簾席ノ簾ノ下
コリ女房ノ衣ヲ ヌノツマヲオシ出シテ外ヘ見ユルヤウニ置ナリ女房ノ多ク居コボレタル躰シ著タル衣ニ
ハ此ス別ノ衣シ車ノ時ハ折出ト云

一差几帳 右同書 十二月内侍所 内侍所の御神禾主上
御事ありて典侍掌侍まゐるまけハ童二人まれ帳を
さゝせ給ふ○貞丈云さしれ帳ハ女房行く時左右ニ
童女を立て机帳を捧げもさせ帳ニテ顔を隠して行

くし出陸の歎し

一シナガトリ 枕草子 万葉ニシナガトリ井ナ野トツ
ヽケ又シナガトリアハ氏ツヽケタリ梁塵思案抄ノ
神楽歌シナガトル井ナノトツヽケタリ頭ニ階香取
トアリシナガトル氏アレバシナガトリハ鳥ノ名ニ
ハ有ベカラズ考ベシ作用ノ訣ナルベシイマダ考ラ
レズ

一吉字訓 万葉ニハ吉字ノ訓エノ假字ニ用タリ日吉
ハヒエトヨムシヒヨシトヨムハ俗也住吉ハスミノ
エトヨム也スミヨシハ俗也年々ノエホウハ吉方也

一折松 建武年中行事 十二月 御仏名 出居の前ニ火樋ニ切り

一 杉せさきに女孺（嬬）これをつとむ。頁丈云杉折りくべて燒火をまるし寒を防し

一 衣をこのふこ 同書 紀 ゆげをまこのるあり表ぞこ
のふこの錦をみくまのこのかの方に内侍の簾下といひ
てみまをまをて出に給ひ人は尊師の肩にかづくるし。頁丈
云衣をこハ衣服を納る箱にその箱のふるに物をまく
てかへし後代ハふこばかり別に作てひろがこと号て用也。

一 櫶鰐（ゆしフル山ノ名也） 又櫶日（ゆしヒ日山名） 日本紀（神代巻） 櫶鰐（鰐）ヲ一
書ニハ櫶日トアリ共ニ日向国高千穂ノ峯ニ。クシヒ
ト未。クシフリノ約語也フリノ切音ヒトナルニ。フ
リシフルト云ハ音相通ナリ。クシフリハ。クシヒノ延
コトハナリ

一 さらくしハ古き物語の冊子假字なにさびしき
ものをざらくしと以つ孔詞あり抄物なるも文字を填め
ぞさらくしハ蕭條（せうテウ）の字を特しくるしまいハ蕭々ノ字
音なるべし 蕭條又蕭々共にさびしきこ 又今の俗語
に物さいがしきものをさらくしと云ハ蹤々又蹤々也二字
共ニ女（サ）ハガシトヨム

一 韓紅（韓） カラクレナヰト云ハ韓国ヨリ渡リタル染（染紅）ノ
絹帛ノ事ト思ハルレ圧サニハアラズ此方ニテ染ル
也延喜縫殿寮式韓紅ノ染式ノ分量見エタリ韓ヲ以
称スルハ其色ノ美ナルヲホメテ此国ノ物トハ見エ
ズト云意ナルベシ 古今集在原業平朝臣ノ歌ちはやる

唱ルカ古言ナルベシ

一湯桶讀　湯ハ訓ニテユトヨミ桶ハ音ニテトウトヨム如此音訓ヲ交ヘテヨムヲスベテ湯桶讀ト云テ儒者ナドハ甚笑フ事シ儒者ノヨムニハ湯桶讀ハ可笑事ナレ𪜈吾国朝ニ上古ヨリ云馴レタル詞ニハ湯桶讀多クシテソレヲ云ヒ違ザルヲ故実ノ習事トスルユヘ東山左大臣実熙公名目抄ヲ撰ビ置給ヘリ湯桶讀モ讀法ノ一ツシ儒者ヲマ子テ笑フ事勿レ今世ノ儒者ハ偏ニ漢土ヲ貴テ吾国ヲ賤シメ吾国ノ風俗ヲ皆漢土ノ風俗ニ変ジ改メン事ヲ欲ルハ国躰ヲ知ラザル鼻ノ先智恵也聖道ノ実ヲ知ラザル也

一冠額　厚額薄額半額今世詳ナラズ今ハ薄額ヲ用ラルヽ也古画ヲ見ル

此所高キアリ是厚額カ円低キアリ今ノ薄額ノ躰也厚額半額共ニ鳥羽院以来冠ヲ紙ニテ張板ニシタル時ヨリ此差別モ出来リシナルベシ

一阿弥陀経語ノ誤ニ経ニ曰彼仏国土常作天楽黄金銀地無昼夜六時而雨曼陀羅華云々此昼夜ノ二字釈迦ノ口ヨリ所出歟抑又彼経ヲ飜訳セシ鳩摩羅什カ誤歟盡夜ノ変易アル国ナラバ万事万物変易シテ盛衰栄枯アルヘシ然ラバ此娑婆世界ニモ異ナラザル国也何ゾ極楽国ト謂シヤ凡昼夜四時事物変易ナキヲ

極樂国ト謂ベシ此事無因ノ弁ナレ𪜈彼経ヲ見テ其
偽言ノ拙キヲ笑テ記耳

一唐花唐鳥ノ文　物ノ文様(モヨウ)ニ奇花ヲ画テ唐花ト号シ異
鳥ヲ画テ唐鳥ト云然レ𪜈唐ニ其画ノ如クナル花鳥
ハナシ其カラト云ハ唐ニハアラズ空ノ字ナルベシ
空ノ字カラトヨム器物ノ中ニ物ヲ納メ入ザルヲカ
ラモノト云ハ空物ノ字也カノ花鳥ハナキ物ナルヲ
作テ画クユヘ空(カラ)鳥ト云シ又唐草モ前ニ記ス如唐ノ
草ニアラズ是ハカラ(シ)草ノ略語シ又空草ト云ハン
モ理背カシ

一妄作太刀　糸ニテモ革(カハ)ニテモ太刀ノ柄巻(𪜈)ニ鞘ノ
ノ口(クチ)ヨリ二ノ足ノハヅレニデ柄ノ如ク巻リヲ渡リ
巻ト云此太刀ヲ巻太刀ト号シテ武士鎧ノ上ニ佩タ
太刀ニテ古ヨリ定マレル制也総テ公家ノ衆装束ノ
上ニ佩ルヽ太刀ニテモ柄巻カズ渡巻モナシ是亦古
ヨリ定マレル制也然ルニ今天明二年壬寅四月将軍
家若君家斉ニ御元服御官位任叙ノ事ニ就テ勅使院
使等江戸ヘ参向アリキ其公家衆皆太刀ヲ僕従ニ令
持ラル其太刀ノ制何レモ皆糸ヲ以テ柄ヲ巻キ渡リ
巻ヲバ巻ザル太刀也ト精シク見タル者予ニ談リキ
其太刀ノ制柄ヲハ巻テ渡巻ナケレバ武太刀ニモ非
ズ朝庭ノ制ニ如此ノ太刀ハ曽テナキ者也是妄作ノ

太刀也セメテ太刀ノ類ハ故実ヲ尋テ本法ヲ以テ制作セラレヨカシ。今ハ公家ニテ故実ヲ知タル人ナキト見ユ

一 袞宣旨　源平盛衰記巻三十（ニナテウラ）云白井法橋幸明ト云悪僧アリテ袞宣旨ヲ蒙テ山門ニハ安堵シガタク云々當山千僧供ノ料所胡桃庄ニ忍居タリ云々此袞宣旨ノ事或説ニ冬夜禁中夜井僧ヲ憐ミ於テ袞ヲ賜ル宣旨也ト云ハ妄説也信ベカラズ此宣旨ノ事ヲ橘嘉樹カ滋井公麗（キンカズ）卿ヘ問申ケレバ綸旨抄ヲ手ヅカラ抄写シ於タリ如左

一 綸旨抄袞宣旨事

乾元元年十二月七日　宣旨

延暦寺住侶頼在狼莅本社祭礼奉射大官神輿科條不軽罪責有重觸仰門主虽召其身忽諸朝威剰搆虚病勘之舊規先儒未難摘後訪之支左史未記早仰撿非違使并武畧輩等宜搦進其身

乾元八九十二代後二条院ノ年号也

乾元元年十二月七日　宣旨

延暦寺住侶弁豪猥荏本社祭礼奉射大宮神輿為其罪虽召其身忽擲止観稽古之業既有叡山遂電之間早仰五畿七道諸国邊山宜搦進其身縦削跡於台嶽之外誰家全命縦隠形於牽士之中何處容

七十　卒土

身繹因論綍敢莫怠慢

藏人右京權大夫平仲高奉

右橘嘉樹ガ藏本ヲ写ス本書字躰行草相交疑字如本写之今按衾宜旨ト云名目国史令式等ニ未及見也蓋中世ノ俗称歟僧ノミニ限ラズ俗人ニテモ称スル歟衾ハ被リテ身ヲ覆フ物ナル故罪アル者ヲ刑センガ為ニ上ヨリ罪人ヲ覆タマフヲ以テ衾トハ云カ今俗ニ天ノヤミガカヽルト云如ノ意歟未詳

一片衣　きぬかつきのり紀ニ為遠朝臣赤衣ニ紅の片衣をきるとアリ其下の文ニ為遠朝臣赤衣紅帷子あり然れバ片衣の字カタビラとよむべし外の書ニ帷を片衣とまたる例を見えば有るこれを記載し片衣をカタビラトよまむなる得るなるべしカタビラト云ハ地ヲ單ニテ裏ナキ物の惣名し裏ナク片方ニテヒラメクカタビラト云し絹ノ單ハ絹ノカタビラし麻ノ單ナルハ麻ノカタビラ也

一押紙掛紙　古書ニ押紙トアルハ紙ヲ切テ何ニテモ書テ本書糊ニテハリ付テ置クヲ云掛紙トハ常ノ状ニテモ文書ニテモ巻タル上ヲ別ノ紙ニテ包ムヲ云包紙也表巻片云

一裏書　古書ニ裏書ト云フアリ古書ハ鳥子紙ノ巻物ニ書ク依之表ノ本文ニ漏タル事或ハ勘物ナドヲバ巻物ノ裏ノ方ニ書ヲ云し

一大明神　非華経ニ曰我滅度後施悪世中現大明神廣度衆生○大明神号ハ仏経ヨリ出タリ即チ権現ト同意歟○文徳実録巻三文徳天皇仁壽元年六月甲寅詔以近江国散久雑度神列於明神云々此文ヲ見レバ以前ヨリ明神ノ号有リ来ル故列於明神ト云事モアリシナルベシ然レ𪜈前々ノ国史ニハ見エズ延喜式神名帳ニ名神ト云称アリ又公式令ノ詔書式ノ発言ニ明神御宇トアアカラカミ。トアソノシタシロシメストヨム読日本紀ノ宣命ニハ顕神トアリ明神ト同シ捴テ大事ノ宣命ニハ明神御宇ノ詞ノ発言トセリ帝徳ノ清明神聖ナルヲ自賛シタマフニハ非ス清明神聖ナランヲ欲シ恭敬シテ宇内ヲ鏡御シ玉フ意ナルベシサレバコソアカラカミトアメノシタシロシメスミミ。トノ助語アリ是ハ大明神ト異也

一通天文者　三代実禄巻十八清和天皇貞観十二年十二月廿五日壬寅制云々又聴六位已下着鳥犀帯但有通天文者不在聴限○是俗本ニ天文ニ通スル者有テバト訓點シタルハ大ニ誤也如此ニテハ義ヲ害ス通天ノ文有ル者ハト読ヘシ通天トハ犀角ノ文ノ名ナリ委ク木草綱目ニ見エタリ

一人始　天地開ケシ時国常立尊始テ唯一人出生シテ弓ニ人ハ毎リシト思フハ愚也其時天地ノ間ニ一度

ニ男女幾万人生シ出ノタランモ知ラズ譬ヘハ物腐レ
テ蛆(ウジ)ノ出生スルガ如シ其蛆幾百万モ一度ニ出生ス
ルガ如クナルベシ人ノ始モ一度ニ男女幾百万人モ
出生シタル中ニモ国常立尊ハ才智大ニ秀テ聡明叡
智ニテ人事生業ノ營ミニ曉(サト)クシテ近キ人ニハ其営
ヲ教ヘ遠キ人ハ見習聞習テ其徳沢ヲ蒙リシ故自然
ニ国常立尊ヲ崇敬シ詩(呼諸カ)人ノ為ニ推挙ラレテ人ノ上
ニ立タマヒシナルベシ其功ヲ大ナルガ故ニ其名高
カリシニ依テ其ヲ語リ傳ヘテ末世ニ至ルマデ其名
聞ヘタリ然レバ古史ニ国常立尊一人ノ名ノミ記シ
テ名ノ聞ヘザル常ノ人ヲバ記サヾルナルベシ其ヨ

リ以後ノ神モ皆其赴ナルベシ推テ考ベシ俗傳ニ国
常立尊ヨリ以下伊勢ノ二尊ノ前ノ神迄ヲ無形トシ
五行ノ異名ノ如ク云ハ日本紀古事紀ヲ會能セズ理
説ヲ以テ作タルミ又伊弉ノ二尊ニ至テ初テ男女ア
リト思モ愚也蛆ノ出生スル如ク幾百万人モ一度ニ
出生スルナレハ国常立尊ノ時男モ女モ出生シタル
ナレ𪜈女ニハ名高キ者ナカリシ故語リ傳ヘズ伊弉
冊尊ハ女ナレ𪜈聡明賢才有テ伊弉諾(諾)尊ト共ニ大八
洲ヲ経営シ夫(ヲツト)ノ尊ヲ輔佐シタマフ程ノ事ナル故女
ナレ𪜈其名高クシテ末世ニ傳リタリ其時始テ女出
シタルニハ非ルヘシ天下ノ人ノ多キ中ニ名モ聞ヘ

ザル常人ハ其名ヲ知ル者ナキガ如シ

一生飯（サバ） 生飯俗ニ散飯ト書リ是ヲサバト云也飯ヲ器ニ盛タル上ニ飯ヲ小ク丸メテ上ニ置ヲ云也是仏家ニテスルヿ也僧徒ノ飯ヲ食スル時先此生飯ヲ取リ器ニ置テ呪文ヲ唱テ訶利帝（カリライ）（天竺ニテ食物ヲ作始クル人トカヤ云）ニ供ヘ祭ル是仏家ノ習俗也然ルニ吾朝廷御飯ニ生飯ヲ置ク事アリ是代々ノ天子佛法ヲ崇敬シ玉フ故仏家ノ習俗移リ（ヌタル）也（生飯ノ事禁秘抄ニ見ヘタリ）又神供ノ御飯ニモ生飯ヲ置ヿアリ是モ行基弘法傳教慈覚智證等ノ僧本地垂跡ノ説ヲ造リ出シテヨリ神仏混雜スル事盛ニ行ハル故仏家ノ習俗何トナク神ヘモ移リタル也

（斎院神供生飯ノ事左経紀ニ見ヘタリ）是ノミナラズ神社ニ仏家ノ習俗交ル事アレ𪜈神職等モ心付ズ知ラス事アリ

一舊事記 尾張国 東照宮神主吉見左京太夫源幸和朝臣（𪜈四位下也）者博覧豪傑ニシテ国学弁疑五部書弁其外神道ノ書著述数篇多シ皆俗傳ノ差誤ヲ弁明セリ然ニ其編書ニ舊事本紀ヲ引テ證トセルヿ多シ舊事紀ハ古キ偽書也明眼ナル吉見氏舊事紀ヲ用ル事不審也或説ニ旧事紀ハ正キ古書ナレ𪜈聖徳太子馬子宿祢ノ薨後ノ事ヲ後人加筆セシ故偽書ノ如ク見ユ其加筆ヲ捨テ正文ヲ用ベシト云リ吉見氏モ亦此或説ノ如ノ見識歟然レ𪜈舊事紀ニ太子馬子ノ薨後ノ事

ヲ載タル外ニ偽書ノ證多ク見ユ其證ハ愚述ブ舊
事本紀剥偽ニ委ク記タレバ今略之且旧事記ニ載
ル所ノ神名日本紀古事記ニモ見ザル者甚多シ是亦
怪ムベキノ其一ツ也彼舊事紀ハ古キ偽ナル故古キ
ニ惑テ古今ノ学者引用タレ所ハ信用セズ
一小口袴　大槵秘抄云君ハ又節の集りの御ならぬかぎり
かほんさしぬさふこしまつるまはいぞ苔ハのしかまつるまは
ゑりかハたるさかるまはいぞはまつ足あそばせ付ハあらち
のはたりのとゆとのをゑしてなそばはこくらのはたりのは
こあのひのあやの紅のたりのくるてさくまつるふは○侍中群
要云小口袴如指貫者紅染綾也或入綿ノ○紫式部日

記云くしはたりかしはくらはそてまつり云々壺井義知注
ニ云御直衣ハ御引直衣シ小口ハ紅ノ小口ノ袴シ○
西宮記ニ云小口袴冬時主上着之深紅入綿或ナ之桃華葉
葉ニ云小口袴紅梅頗濃色指枯如指貫冬カ練隻生
一神名称命称尊　神名某命某尊ト称セリ命モ尊モミ
コトヽヨムシミコトハ御事也ミコトヽ云ハ神ヲ貴
ミ敬ヒテ云詞シ今世ノ詞ニテ御方ト云ガ如ク又某
殿ト云ガ如シサレバ神自身ニ我名ヲミコトヲ付テ
ハ称シ玉フベカラズ日本紀古事記ナドハ後世ノ人
上世ノ神ノ事ヲ記ス故悉ク命ノ字尊ノ字ヲ付テ書
タル也日本紀ニ君神ニ尊ノ字ヲ用臣神ニハ命ノ字

ヲ用ヒテ差別ヲナセリ古事紀ニハ其差別ナク皆命ノ字ヲ用タリ是ハ記者ノ心任セニスルヿシ神代ニハ文字ナケレバ文字ノ事ハ曾テ沙汰ナシ近世神道者ノ中ニ自身吾ガ神名ヲ付キテ内々ニテ某ノ命ト号スル者モアリト聞及ベリ神ニシタラバ大愚鈍ナルベシ誰カ貴ブ者アラン大ダハケノ命ナドヽモ名ノレカシ天ノ逆弟ヲ天ノシヤチホコト云ガ子マジキ者ヽ又近世神道者ノ死タルヲ某門人某死人ヲ神ニスルトテ社ヲ建テ祭ル事アリ某社ヲ某ノ霊社ト称ス霊社号ヲ贈ル事国史古書ニ見及ザル事ヽ神ニスルト云ハ仏法ニテ死人ヲ仏ニスルト云ラウラヤミテ一子ヲスルカ後代ニ及タラハ儒者ノ死タルヲ聖人ニスルト云事モ出来マジキモノニモアラズ医者ノ死タルヲバ神農ニスル歟

一練薄物　西三条装束抄小直衣ノ章練ノ薄物トハ竪ハ生ス緯ハ練織ヤウハ穀ノ如クモ戻リテ織也○貞丈按練薄物トアル練ノ字ノ下ニ緯ノ字脱闕シタルヽ練緯之薄物也又本文竪ノ字ヲ経ノ字トナスヘシ又按子リヌキノウスモノ練ノ薄物ト云フハ畧語ナリ

一武士武家　武士ト云ハ朝廷武官ノ人ノ惣称ニテ上古ノ書ニモ武士ト云名目アリ又武家ト云ハ鎌倉頼朝将軍以来ノ事ニテ上古ノ書ニハ武家ト云名目ナ

シ近世板行ノ俗書ニ多田満仲義家頼政等ノ事ヲ武家ト書タルアリ誤ナリ皆武士ト云ベシ又或書ニ頼朝以来ノ事ヲ云ニ武家ノ世ニナリテト書ケリ是誤ニ武家ヨリ天下ノ政ヲバ出セ氏王位ヲ奪ハズサレバ武家ノ世ニナリテトハ云ベカラズ武家ノ政ニナリテト云ベシ

一散物　凡諸ノ調度ニ打タル金物ニ散シ物ト云ヲ古ニ見タリ桃花蘂葉ノ車ノ篇扇車ノ章ニ散物トハメツキシサシタル金物ヲ云也トアリ（又古書ニ金物ヲ云テ塗物トアルモ散物ニ同シ）

一烏帽子之眉　烏帽子ノ前正面ニ内ヨリ押出シテ太ニ尖タル所アリ此尖リタルヒダノ下ニ少シ押シタルヒダヲ眉ト云凡ニアルヲ左眉又左上リ氏右ニアルヲ右眉トモ又右上リ氏云両方ニアルヲ諸眉ト云又諸額氏諸上リ氏云諸眉ノ小キハ小諸眉ト云也野宮定基卿ノ新井筑後守君美カ問ニ答ヘタマイシニハ左眉右眉ナドノ名目舊記ニ不及見左上リ右上リ諸額ト云フハ一条家抄故実清譚ニ見タル由宣ヒキ負丈按ニ野宮殿ノ誤也西三条装束抄ニ左眉右眉諸眉小諸眉ノ名見タリ彼抄ハ逍遥院実隆公ノ作也又古実清譚ニ諸額小諸額右上リノ名見タリ彼抄ハ三光院実澄公ノ作也逍遥院ハ三光院ノ祖父也時代遠カラズ然レバ眉ト云額ト云上リト云此三ツ通称

ニテ新古ノ差別ナキ事ト知ベシ○又云烏帽子ノ眉
モサビモ鳥羽院衣文ヲ始メ給ヒシ以来紙ヲ以テ張
抜ニシテ作ルヨリ如此事アリ其ヨリ以前紗綃ナド
ニシテ漆塗ニシテ用ヒシ比ハサビ眉モナカリシナリ
一野摺 新野間菅野宮定基卿曰黄布ニ摺レ柏称之野摺ト
由見宇治左府ノ記ニ云ト貞丈云是ハ褐衣ノ文ノ名也
随身ノ着ル服也
一大口袴 今世猿楽乃装束袴とするを何見ても大口の袴といふ
倉山科などの衣文師などハ今堂上にて用ひられざる袴なり
猿楽の装束に作り出たる物のやうにおもへるにや古き書ともあ
またしるされハ古きこととしらぬなり東鑑平家の比乃
記録とも見えず大口をね平家も伝侍とも云の袴の下に着
給て見えるも又大口だにみえる事もありし平家の
物語盛衰記などにも見えて侍り納言が枕草子にもおほ口
ながさよりもひろければあやしきといへる
云つるも大くちの袴のしろの方大きなるがおほくかくいふなるの
大口なればあきらかに大くちといふ名付たるなり今世束帯の
時着る袴の下に着て見ゆる赤大口ハ是しかり新大口と名
付るにハ違ひてロ大きなるなしと見え古への名
ありしを増へ遣つく今は大口といへるべし是ハ指貫
の下にかさねて着る下袴一名腰継トモ云と云袴に似たるものにて其名
ハ白きと赤きとハ下袴と大口とハかわかれたれどむかしハ一つ物

まで赤き下袴なりけんも志ろけ又小口の袴といふものあ
里茶に記しぬ大口に對して小口といふなるべし若束のす
もすべく多羽織の衣文を始めのしたり一変して又代
を歴るに隨て遣るまゝ又云續世紀神皇正統記などに
を考るに多羽織と有仁左右衛門とハ美男にて好色にかけ
里給ひけれバかゝたつくりよそおひのたん為に多へ御会
ゆゑ衣文と云ふまを始めなるべきされ大口のたゞ白きゝかゝ
ゝり屋のかどさし出て見ぐるしなどいふまゝ大口見
さまるまハ出されたるを武士などハ出て尾(ぎか)して見用せし
不武士猿乗などのゝ此般のやうにおしなるべし言ハ公家
まで大口用ひられしまハ桃菓子に見へるなん押繰るべし

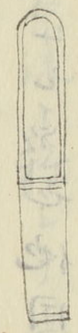
一蛇貝仏像現　池上本門寺ノ僧来て説話の序に本門
寺ニ蛇貝南無妙法蓮華経ト文字現タルアリ貴キ事
こと云ひて夫ハ細工こ予作て見をべしとて作り出
て他日僧来りしに見せたり要製法ハ蛇貝に像仏に
ても仏名にても生漆(セシメウルニナリ)を以て半て蛇ノ穴を
蝋にてふさき漆をよくかうして酢を十分に入て二
十日程出て相酢を砂を以て能磨けバ漆の付たり所言
くあらはるゝ是無量の戯なれ共如此事も知り合け
バ僧などに詐かさるゝまなし奇妙不思議ハ皆造り
事なり

一武家記録　昔ノ武士多ハ学文ナキ故武家ノ事記ニ

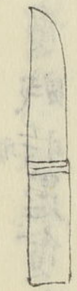
置タル書少シ然レ𪜈文才ヲ生シ得タル人モ有テ学
文アリシニヨリテ書籍ヲ著シタルアリ其書ハ武家
ノ古キ家ニモ傳ハリ他家ニモ傳ヘ写タル本世ニア
レ𪜈甚スクナシ古ノ実録ナレバ考證ニ備フベシ今
世小笠原流ト称シテ武家ノ礼式ヲ教者アリ往年浪
人水鳥(島先)傳れ東門ト云者後剃髪シテト也(ボクヤ)ト云此者彼
小笠原流ヲ廣ク教タリシガ彼ト也浅智アル者ニテ
様々故実ニナキ造リ事ヲ書テ傳書トシ世ニ弘マリ
偽説妄作甚ダ多キ故識者ハ彼者ヲ甚賤シメテ武家
ノ記録ハ皆此類ニテ取ルニ足ザル者トシテ古キ武
家ノ実録ヲモ一様ニ心得テ見ル者トモセズ歎ベキ

事也公家故実ヲ学ブ者ハ弥武家ノ書ヲ賤ムルヿ甚
シ公家ノ書ニテ絶タルヿ知レザル事ノ武家ノ故書
ニテ知ルヽヿアレ𪜈偏見ニテ益ヲ得ザル人アリ可
惜哉彼ト也ガ偽作妄説ノ上ニ其徒年々猶又偽作妄
説ヲ増補シテ其説盛ニ行ハル諺ニ目クラ千人目ア
キ千人ト云ハ昔ノ事歟今ハ目クラ千人目アキ一人
アル歟ナシ歟也他国ノ事ハ知ラズ江戸ハ延享ノ比
ヨリ文学(学先)廃シテ行ハレズ貴賤時(昧カ)愚貧欲ニ成レリ
一竹刀小児産生ノ時竹刀ヲ以テ臍帯(ホソノヲ)ヲ截ル事ホソノオ
ヲキルマ子ヲスルナリ今ハキルト云ヲ忌テツグトイフ神代ヨリノ習(ナラハシ)俗也日本
紀ノ一書木花関耶姫ノ児ヲ産タマヒシ時臍帯ヲ截

リシ竹刀ヲ棄シ處竹林トナル彼ノ地ヲ号シテ竹屋
トスト見タリ日本紀ニ竹刀ノ二字アヲヒエト訓来
レリ今モ竹刀ヲ用ル也竹刀ヲアヲヒエト云ハ古書言
也又竹刀タナト云モヨシ



如此作テヘラト号スルハ故実ニ
違ヘリ



如此ノ形シ或

一如意助老　如意ハ背ノ痒キヲ掻ク物シ俗ニ玄孫ノ
手也是ヲ助老氏云ハ非也助老ハ別ノ物シ古事談巻
云鳥羽法皇登山御幸之時前唐院宝物御覧之時中略今
一ツハ木ノ十文字ニ差タル物人不知之通憲申云是
ハ助老ト申物シ老僧ナドヨリカヽル物シ大夫略服是

躰ノ物ニ候云々

一三位称卿　続日本紀巻八元正天皇養老五年冬十月
癸未太政官處分唱考之日三位称卿四位称姫五位先
名後姓自今以去永為恒例○貞丈云姓ハ後代ニ尸ノ
字ヲ用ユ古ハ姓ノ字ヲ用カバ子トヨム朝臣宿称真
人ノ類也名トハ名乗也四位称姓トハ三位名卿ト云
如ク四位ヲハ某朝臣某真人ト云也五位先名後姓ト
云本文名ノ字姓ノ字轉倒欲本文ノ如クニテハ四位
ニ同ジ五位先姓後名トアリシナラン藤原朝臣名某
如此ナルベシ又本文四位称姓トアルヲ名不称シテ
唯藤原朝臣ナド唱ル事トシテ見ルニ考撰ノ人数多

ケレバ紛ルベシ前ニ云フ如クナルベシ五位先名後
姓ノ語ノ名姓二字上下倒置傳写ノ誤ナラン

一陵碑 続日本紀巻八元正天皇養老五年十月丁亥太
上天皇召入右大臣従二位長屋王参議従三位藤原朝
臣房前詔曰中略朕崩之後宜於大和国添上郡蔵宝山
雍良峯造竈火葬莫改他處謚号称其国其郡朝廷馭宇
天皇流傳後世中略又庚寅太上天皇又詔曰中略其轜車
霊車駕之具不能刻鏤金玉繪餝丹青素薄是用卑謙是
順仍丘體無鑿就山作竈芟棘閑場即為喪処又其地者
皆殖常葉之樹即立刻字之碑○太上天皇ハ元明天皇
也其碑写本別ニ有之

一神代文字 藤原忠寄云巫覡家ニ神代ノ文字也トテ
蔵ル者アリ注古文字渡リシ時書ヲ学ブ事諸国辺鄙
モ遍アラズ筆記スルヿハ知レ氏文字ヲ知ラズ故ニ
各方圓尖曲等ノ類ノ形ヲ作リ一巳ノ記符ニ用ヒ画
シ者ノ残リ傳リシヲ後ニ神代ノ文字ト誤リ云ナラ
ン往年家僕ノ書ヲ解セサル者右ノ事ヲナス者又芝
浦ノ漁人帳モ亦然リト負丈按蓋然ラン頗然ルニ神
祠巫家等ニ傳ル者竹簡漆書也ト云然ラハ好事ノ徒
漢土ノ故事ヲ聞テ設ケ造リタル也

一日本帝祖為呉泰伯説 釈圓月ト云者東海一漚集ノ作者日本
史ヲ作テ朝ニ献ス其呉泰伯ヲ以テ日本ノ始祖トス

此故ニ誤アリテ行ハレズト云事詳ニ蕉了子ガ史記抄ノ跋ニ見タリ圓月ハ建武年中ノ人蕉了ハ文明年中ノ人也ト井沢長秀ガ俗説弁記ニ見タリ或儒者ノ説ニ晉書ニ日本ノ事ヲ記シテ其国人自謂泰伯後ト見タリ證トスベシト云リ貞丈按凡漢土ノ書ニ日本ノ事ヲ載タルニ大ニ違タル事ドモアリサレバ漢土ノ書ニ載タル事ハ日本ノ證ニハ用ベカラズ日本ノ国史古記ニ符合シタル事ハ漢土ノ書ニ載ル所モ可信用サモナキ事ハ不可信用近世儒士ノ中ニ此日本ニ生レナガラ日本ヲ自夷狄ト称シテ甚賤シメ漢土ヲハ中華ト称シテ大ニ尊敬スル不義不礼ノ国賊アリ

吳泰伯ヲ日本ノ始祖トスル説ハ彼国賊等ガ心ニ適フ故幸ニシテ其説ヲ主張シ牽強附會シテ潤飾ヲ加ヲ著述スル者多シ秦徐福ガ始皇ノ命ヲ奉テ仙茶ヲ求ルトテ船ニ乗テ行方知レズナリシヲ歐陽永叔ガ日本刀ノ歌ニ徐福行時書未焚逸書百篇今尚在スト作リタルヲ證ニ取テ徐福日本ニ渡来シヲ熊野ノ神ニ祭リシト云フ俗説モ亦同日ノ談ナリ信用スル勿レ

一南瓜　カボチヤト云一名ボウブラトモカボチアハ其出處ノ地名ニテボウブラハ其瓜ノ蛮名ナルベシ還羅ト云国ノ東南ニ名臘国アリ又真臘氏書ク一名

東浦塞氏カンボチヤトヨム採覧異言ニ見タリ此カ
ボチヤ瓜予ガ幼少ヨリ弱冠ノ比享保年中マデ市ニ
賣ラズ無キガ故也稀ニ人ノ家園ニ種ル者アリシ長
崎ナドヨリ其種ヲ傳来セシニヤ常ニ見馴ザル物ナ
レバ毒物ナラン歟トテ食セザルモアリシ元文ノ初
ノ比ヨリ所々ニテ種ヘ弘メテ今ハ市ニ多ク賣リ夏
秋ノ菜物トナレリ又薩ナ芋モ本ハ琉球国ノ物ニテ
他国ニハ無リシ享保ノ比　上意ニ百姓ノ粮食ヲ助
クベキ物ヽト思シメシ所々ニテ作ルベキヨシ命ゼ
ラレテヨリ今ハ諸国ニ多ク成リタリ民ノ食ヲ足シ
タクマフ賢慮貴フベシ

一文字四聲　梁武帝對ニ群臣ニ問ニ四聲ノ調子ヲ朱弃進忽答曰
天子万福（出所ヲ忘タリ）天平子上万去福入

一神籬（ヒモロギ）瑞籬（ミヅガキ）斎籬（イカキ）　神籬ヒモロギトヨム神社ノ在ル
處ノ外廻ノ垣也中ニハ必神社アル故神籬（ヒモロギ）ト云テ神
社ノ事ニモ用ルナリ其垣ハ杭ヲ幾ツモ連子並ベテノ
杭ト杭トノ間ニ隙アリテ物ノ漏リテ透通ル　ユヘヒ
モルカキト云フヲ略シテヒモロキト云ナリ（ルトロ音相通）
然ルニ或神道者ノ説ニヒモロギハ日守木（ヒモロギ）也神霊ヲ
社ニ祭テ日ノ神天照太神ノ教ヲ守ル事也人ノ躰ニ
テハ心ニ正キ道ヲ守ル人身ノ日守木（ヒモロギ）ト云ナドヽ例
ノ所舎ヲ云ラ心学ニ引落スシ吾国上古ノ人風俗物事

ニ巧ナラス何ゾ垣壁ノ雜物ノ名ニ至迄奥深キ理ヲ巧ミテ名付ルヿアランヤ瑞籬ミヅカキトヨム。スベテ水気ヲ含ム物ハミヅくシク潤アリテ。ウツクシキ故。神ノ物ヲハ何物ヲモ。ミヅノ何ト云ヿハホメ詞也。瑞ノ字ニ泥ムヿナシ是モ或神道者ハ万物ノ出生ハ一元水ニ起ルナリヽ理学ニ引落シ様々附會ヲ云ハ聞モウルサシ斎籬ハイガキトヨム。イミガキヲ畧シテ。イガキト云。イミハモノイミニテ穢ヲ忌ミテ神ヲ畏レ敬フ也サレバイミシキカキト云意也イガキモ。ヒモロギノ事也凡神ノ事ニイミ何ト云ハ皆同事也イミト云ハウヤマヒ詞也（御ノ字ヲミトヨムモノイミノ略ニテウヤマヒヨトバナリ）

一古史通　此書ハ白石翁ノ撰ミテ世之学者信用スル書也然ヒ舊事紀伊勢外宮五部ノ書等ヲ引用タリ彼書ハ偽書ニテ證トスルニ足ザル者也故ニ予ハ古史通ヲ取ラズ白石翁漢学ニ於テハ豪傑ナレヒ本朝ノ事ニ於テハ漢学ノ片手ワザニシタル事故精カラザル事アリ軍器考ニモ少々誤アルハ其故ナリ

一軍器考　是モ白石翁ノ撰也此書ハ愚徒随筆ヲ本基ニシテ自見ヲ加ヘ潤飾シテ書ル者也表ニハ顕サヾレヒ武用弁略モ少摘取レル所モ見ユ愚得随筆ハ白石翁ノ妻ノ弟朝倉孫右エ門日下部景衡ト云者浪客ニテ桎原流ノ鎗術ヲ教ルヲ以テ業トセリ此景衡武

器ノ故実ヲ好ミ古書并近代ノ書ヨリ武器ノ事ヲ抜
書シテ十冊トシ愚得随筆ト号ス予白石翁ノ孫新井
源太郎邦孝（孝氏）ト知音ニテ彼随筆ヲ借リ写シ又熟現（覧氏）ル
ニ是ヨリ軍器考ハ出タリ彼随筆ノ中ニ引書ノ名ヲ
去違タル所ハ軍器考ニモ同ジク書違タリ鞍鞽鞍瓦
ノ条ニ敏達紀ヲ推古紀ト誤リ毛沓ノ条ニ餝杪ヲ霊（雲）
岡杪ト誤ルガ如キ両書相同ジ是ニテ考ベシ是又片
手ワザナル故精カラザル所アリ其外誤所々ニ見タ
リ可惜ヽヽ

一俗説并細川氏ノ家臣銕炮頭井沢十郎左エ門長秀
号蟠龍子ガ撰也古今ノ俗説ノ傳ル事ヲ悉ク弁論シ
トイフ

和漢ノ群書ヲ引キ證トス豪傑英才誰カ又及ハン然
レトモ舊事紀并倭姫命世紀以下ノ伊勢外宮ノ五部ノ
書及度會家ノ神書等ノ偽書ヲ引テ證トセリ是其瑕
也可惜々々何ノ書モ一モ誤ナキ書ハナキモノシ正
シキ上ニモ正シク撰シト欲シテダニ不慮ノ誤有テ
人ヲ惑シムルヿアリ然ルニ好テ偽書ヲ造テ人ヲ惑
シメンヿヲ謀ルハ何ナル意ゾヤ凡博学先生ト予ガ
如キ浅学小生ト是ヲ比スルニ鴟鵠ト燕雀ヨリモ猶
大ニ違リ然ルニ彼先生等ノ誤ヲ小生カ見出スヿノ
アルハ怪ムベキノ甚キ者也彼先生等ノ誤アルモ又
怪シムベキノ甚シキ者也

一日陰蔓（カゲノカヅラ）先ノ随筆ニ日陰蔓ヲサガリ苔ノ事ト書ニ
ハ兼良公ノ説ニ惑テ誤（ル）也今発明シタル故此ニ記ス
也「兼良云ノ三箇童事抄云日ゲノカヅラト云ハ白キ
糸ヲアヤヌルヨウニシテ石ノ面ニ或ハ十二筒ヲ対
石ノ面ニマハシテ葉ヲ出シテ葉ノカゲニ蘿ヲ云ヲバ日ケ
草ト云ル郭代ノ歌ニ「ヨルノツユヲモ日ノ光ニ
サガラケトラヌ心」ヲ説シサガリ苔ハ別物ニ「和名抄云唐韻云蘿ハ女蘿也
注ニ曾何及日本紀私記云蘿比加介」玉篇云蘿虎多ノ
切松而生女蘿也」古訓ニカケ今訓テナンニカヅラ是
蔓草陰湿ヲ好ミテ日陰ニ繁茂ス故ニ松葉ノ陰ノ頼
テ延蔓也依テ之ニカケトノ名ツク蔓艸（ツルクサ）ナルユヘヒカゲ
カヅラニ云サガリ苔ハ深山ノ松枝ニ生ジ垂レ下ル
細リニテ色白青シ糸ノ絡ヲ掛ルガ如シ是ヲ。サルヲ
しらいと。話し日本紀ニ。天照大神天ノ磐戸（イハト）ニ入タマヒ
シ時天細目命（アメノホソメノミコト）俳優（わざおぎ）シタマフニ以テ真坂樹（マサカキ）ヲ髣髴（カツラ）以
蘿（ヒカゲ）ヲ蘿此云詞儗（ヒカゲトイフ）ト為手繦（タスキ）ニ云古事記ニモ天宇受賣命手次（タスキ）ヲ繋
天ノ香山之天之日影（ヒカゲ）ヲ為髣髴（カツラ）ニ天之真拆（マサキ）ヲ云古語拾遺ニモ
天ノ細女命（アメノホソメノミコト）ヲ以テ真辟葛（マサキカヅラ）ヲ為髣髴（カツラ）ニ蘿葛（ヒカゲカヅラ）ヲ為手繦（タスキ）ニ云
ウサギノタスキトス草ヲヒカゲノ葛（カヅラ）ト云説甚誤（ル）シ以テカヅラト云日カゲヲ以テタスキトスルトア

リ日カゲヲカヅラトシ
氏曼モ右ノ三書ニ同ジ冠ニ結ヒ垂ル糸ハ天ノ細女命
ノ古事ヲ学ビタル者ナラバヤサキノカヅラトコソ
云ベシ(ヒ)カゲノカヅラトヤテハ古事ニ叶ハズ彼糸ヲ
アケマキニ結(フ)ヲ是モアケマキノ西方ノ口ナハヤサ
キノ葉ニカタドルニヤ何レノ世ヨリ冠ニ垂ル糸ヲ
日カゲノカヅラトハ唱ヘ誤リケン詳ナラズ又按日
本紀ニ蘿(ヒカゲ)ヲ以テ手襁(タスキ)トストカリテ自注ニ蘿此云比
訶礙(ヒカゲ)トアレバ疑モナク(ヒカゲ)ハ蘿ノ事也是ヲ
捨テ他物ヲ求ルヿ勿レ。蘿ノ蔓ハ。タスキニナルベキ
物也。サガリコケハタスキニナルマジキ物也サガリ

コケヲ日カゲノカヅラト云説ハ冠ニ垂ル糸
ノ躰サガリ苔ニ似タルヲ見テ御(ミ)カゲノ准量(ナゾラヘ)ニテ云
出セル説ナルベシ○神事ノ冠ニ糸ヲ垂ルハヤ
サキノカヅラニシタルヲ躰赤紐ヲ肩ニ掛ルハヒカゲ
ノタスキニセシ躰(ミ)ナルベシ

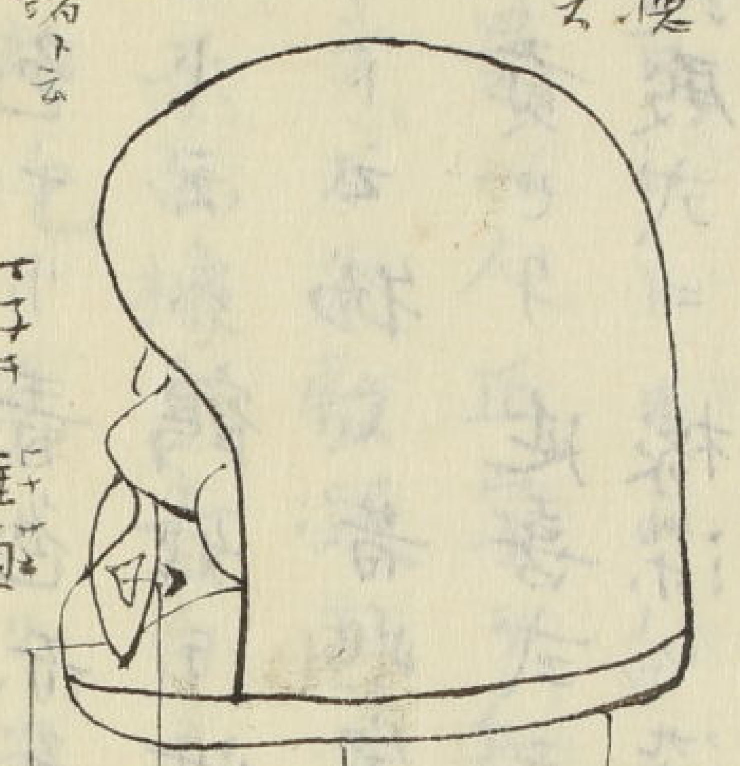
一歌題文字　棟堂(棟堂)花ヲ款冬(ニコゴ)ト書モ信鳥(ニハトリ)ヲ千鳥ト音(ネ)鵐(ホホジロ)
鶺鴒(セキレイ)ヲ鳰(ニホ)ト書燕子花ヲ杜若(カキツバタ)ト書キ杜鵑(ホトトギス)ヲ郭公ト書キ
鬼(キ)ヲ鴨ト書鸐(ミソサヾイ)鷯(ミソサヾイ)ヲ鷦鷯ト書報春鳥ヲ鶯ト書キ告天子
ヲ雲雀ト書鷦鷯ヲ鷭ト書山茶花ヲ椿ト書楝ヲ梶
ト書楝ヲ樗(アフチ)ト書枹(カシハ)ヲ柏ト書梔子ヲ梔(クチナシ)ト書キ牽牛花ヲ槿(アサガホ)ト書楊梅(ヤマモヽ)花ヲ卯杙ト書機樹ヲ枫(カヘデ)

ト骨(曜)麦ヲ梅子ト書芒ヲ薄(スヽキ)ト書芭芒ヲ萩(ヲギ)ト書蔕ヲ
芦ト書天竺苍ヲ萩ト書石長生ヲ葱(シノブ)ト書地錦ヲ蔦(ツタ)
ト書山煙ヲ霞ト書タル類ノ如キ皆誤ナレ𪜈古ヨリ
歌ニ用ヒ来リタル字ナレバ其侭ニテ不可改假令ハ
今シロキト云ヲ黒ノ字ヲ用ヒタロキト云ニ白ノ
字ヲ用ヒ世ニ弘マリテ四五年モ用ヒ習ヘバ終ニ黒
ノ字ヲシロシトヨム白ノ字ヲクロシトヨムハ定ル
ナルベシ是一人正字ヲ知テ改ント欲スル𪜈天下尽
ク改ベカラズ久敷凝固マリタル事ハ変セザル者ニ

一青白ノ橡(ツルバミ)赤白ノ橡　青白ノ橡一名青色𪜈云麹塵ノ事
ナリ天子御袍ノ色ナリ赤白ノ橡ハ赤色𪜈云太上皇
ノ御袍ノ色ナリ青色赤色共ニ禁色ニ橡ハ櫟(イチヒ)ノ実(ミ)ニ
ツルバミト云ハ鶴好テ此実ヲ食ムト云義ニヤ俗ニ
ドングリト云物ニ昔此実ヲ搗潰(ツキツブ)シタルヲ搗橡トテ
国々ヨリ貢セリ延喜式ニ見タリ此実ハ黒染ニ用ル
ニ延喜縫殿式ニ橡染ノ染種ノ分量見タリ青白ノ橡
赤白ノ橡ノ染式モ同縫殿式ニアレ𪜈是ニハ橡ヲ入
テ染ルニアラズ然ルニ青白橡赤白橡ト名付シ事ハ
如何ナル故歟知レズ壷井義知モ不審ノ由云ヘリ貞
丈按青白橡ト云此橡借訓ニテ櫟実ニテハアラジ何
橡ト云色ハ一色ニ非ズシテ他色ヲ兼タル色ノ名ト
聞ユ僧尼令義解ニ木蘭(モクラント)者黄橡也トアリ是黄一色ニ

非ズ黄ニ少シ赤黒ヲ兼タル色也俗ニ云梅染ノ色也
是等ノ橡ハ借訓ニテ。ツレバミナルベシ。ツレトハ本
色ニ連リ交ル意ハミハ食ニテ本色ニ他色ヲ含ムノ
意ケシキバミ千ハミメロバミナトノバミニ同ジカ
ルベキニヤ

一烏帽子名所　高倉家門弟橋嘉樹説　尋常ニ称スル所如此之古事ニハ所見ナシ



貞丈云七十四代鳥羽院衣文ト云事ヲ始タマヒシヨ
リ装束強ナリ冠帽子モ固ナリタル也続世継海人藻
芥神皇正統記等ニ其事見タリ衣文ノ事ハ始マラザ
リシ昔ハ烏帽子モ紗絹ニ漆ヌリテ作リシ故柔ナリ
雨ニ逢テ冠ノヒシゲタル事清少納言枕草子ニ見エ
茨田重方ガ妻ニ烏帽子越ニ髻ヲ捕ヘラレシ事今昔
物語ニ見タリ柔ナル故頭ニシカト引入テカブリシ
故掛緒ヲカクルニモ及バザリシ折テカブレハ折
タル所ヒラメクヲヒレト云タル也平礼ノ字也ト云
ニレヲクハヘタリ後代ヘイライトヨムテ衛府長ノエボシニ
限リテ云ハ故実知レヌ故也衣文始リシ以後ハ冠モ

エボシモ紙ニテハリヌキニシテ固ク成リタリ昔ノ柔ナルエボシノモメテ皺(シハ)ノヨリタル躰木形ニテ打出シテサビト云也木形ニテサビシ打ニ随テ様々ノサビヲ作リ出シタルニ冠モエボシモ固クテ頭ニ引入テ殆(アヤウ)キ故掛緒ヲ用ルニ烏帽子ハ頂ノ上ニ多ヾ載セ置ユヘエボシ内ニ竹ノ輪ナドヲ入レカラクリテカブル是ヲエボシトヾメト云續世紙ニ冠烏帽子ノシリハ雲ヲウカチタレバサラズハ(カムリトヾメエボシトヾメヲセズハト云ナリ)落ヌベシト嘲リタリ捻(捻)テ冠服上古ニ替タル事多シ裝束抄ト云書多ケレ氏皆衣文始リシ以来ノ事ノミ記ス者ニ其故実ヲ説ク人モ皆其流ヲ逐フノミニテ其源ニ沂(サワノボ)ル事ナシ源ヲ尋ザル故詳ナラザル事多シ

中野氏藏書

越後高關
澀谷奚疑
園圃書記